568
7
568-277
1200501515815

紙本

宋西明舊

南京の四

昭和三年一月 帝室圖書寮

芥川龍之介の靈前に獻ず

謹本

南京の一日

帝國圖書館藏

568-277

「南京の皿」の内容

——雲に鳥……一
海邊の町で……一七
古い新芽……三五
影……五九
ふるさとびと……七九
逆目立つ……一二
兄との關係……一四七
所謂生き死に……一八一
父子一面……二〇七
父のおもはく……二三一
竹植ゑて……二四九
ある——話……二七〇
讀脣難……二七七
長い一日……三〇一
乾笑……三三三
或冬の日に……三四五
おもふは——……三五五
「南京の皿」の後に……三七八

小穴隆一裝幀

——雲に鳥

その支波といふ青年は、妻に從へば「鈍感で、だから圖圖しくて、正直と露骨とを履き違へてゐて、――一口に云つてしまふと、何とも感じの惡い男」だつた。「うちへ來る青年のなかで、一等蟲の好かない青年」だつた。

「あんなのと、よくつき合つてゐられるわね。」

しかし來吉は――。

ある晩、來吉は支波と將棋を指してゐた。もう十二時に近い頃で、隣室には丁度妻が輕い病氣で床に這入つてゐた。その晩支波は泊つて行く事になつてゐたので、病人を隣りにしたに拘らず、少し遲過ぎるまで遊び呆けてしまつたのだつた。遲くなり過ぎたと氣がつくと、二人ともたとへ輕くとも病人がゐるだけに氣が咎めて、自とちいさくなつてしまつた。來吉と支波とは、この一番きりで寢ることにしようと、小聲で打合せてゐたのだつた。そのとき妻が突然角のある聲をかけた。

「もう寢ない？　ふたりとも。――」

「あ、もう寢るよ。」

來吉は、ひやりと、――この催促のないうちに寢たいなと遠慮してゐただけに、惡いなと氣を弱く返事した。

妻の寢室と來吉の書齋とは襖一重なので、將棋の駒はぱちんぱちんと枕許に響くに相違なかつた。病氣のとき、氣樂さうに夜遲くまで遊び耽つてゐる、それも特に妻の氣に入らない支波を相手にしてゐるといふ事實が、ひどく妻の神經に觸つてゐるのはよく分つてゐた。さういふ彼女の神經に、一應の挨拶もしないやうな二人の夜更しぶりに一層神經が立つてゐる、こんなにいらいらしてゐるのが二人に分らないのか、といらいらする程いらいらして來る、そんな狀態の彼女だといふことは、分り過ぎてゐたのだつた。それだけに、癇のある聲をきくと、來吉は駒の音をなほ秘めて、「さあ早く。」と支波にうながした。早くこの一番を片づけようとした。

だがなかなか勝負のつかないうちに、彼等は二度目の催促をうけてしまつた。

「まだやるのなら應接へ行つてなさいな。そこではうるさいから。」

まだやつてゐるといふ次第では決してなかつた。又まだやらうといふ意志も少しもなかつた。もう一刻も早く片づけたいとあせつてゐるだけだつた。

「もうしまひだよ。」

來吉等は、このあとを片づけるのにはわざわざ應接室へ行くまでもないと思つてゐた。そんなことをごたごたする暇に片づきさうだつた。で、一層忙しく駒を運ばしてゐたが、全く運惡く、この勝負はなかなかつかず、一手一手と永引くのだつた。

だが、それもやつと片づきさうになつた時だつた。不意に手荒な音がして、妻が應接室への通路へ出たらしかつた。ずるずると、夜具を引ずつてゐるやうだつた。ぱたん、應接室の扉がすさまじく閉ぢられた。

支波は來吉の顏へ當惑の目を向けた。

「惡いですね。よしませう。どうせ僕敗けですから。」

「なに、いいよ。いいよ。まだ敗けだか勝だか分るものか、さ、片づけちまはう。」

來吉は支波の手前、この儘すましにくかつた。とにかく此一番ははつきり片づけて、何事にまれ、それからのことと決心した。

妻が我慢しきれなくなつて此粗暴な手段に出たことはよく分りもし、それまでに彼女を立到らしめたことには、謝まつてもいいが、しかし、此不愉快なものはどうも來吉の「家風」に合はず、

十分憤らせるに足りた。彼は勝負が片づいたら、妻をなじつてやらうと構へてゐた。

やつと盤を片附けると、來吉は支波に、寢たまへと云ひおいて應接室の前に立つた。扉は内からロックされてゐて開かなかつた。彼は鍵穴から長椅子の脚と夜着の裾とを僅かに見た。

「おい――。」

返事はなかつた。

「返事しないか。」

それでも返事はなかつた。

「ここを開けろ。」

内では身動きもしなかつた。

來吉は嚇として來た。なにも彼女の厭がつてゐるのを、故意に永引かせて指してゐた譯でもなし、それどころか出來るだけ早く片づけようと努めてゐたのに、それを知りもしないで、一圖に自分だけがいぢめられた氣で腹を立ててゐる、その彼女の勝手さに、來吉はもう少しで扉を蹴るところだつた。輕蔑し無視してゐる人間の前では、何をしてもといふ氣になつてゐるのが阿呆らしかつた。

「莫迦。」

來吉はどなつてしまつた。なかは、まだひつそりしてゐた。

「莫迦。譯も分らずに何だ。そつちが應接へ行かなければこつちが行く、といふ態度なんか、莫迦、此場合一番下等だぞ。――ここを開けろ。」

來吉は夜着の裾が動くかと、鍵穴で待つたが、徒勞だつた。

「勝手にしろ、莫迦。――だが其處にいつまでもぢつとしてゐたら、つもりがあるぞ。」

來吉は扉の前を去りかけて、しかしかうつけ加へた。

「風を引くぞ。」

支波と來吉とが寢に就て、それからややしばらくすると、妻がまたごそごそと應接室を出て、自分の部屋へ戻る氣配が分つた。

翌日支波が歸つたあと、來吉は妻に自分の青年に對する態度を、例へば男のつきあひといふやうな事を語らうかと考へたが、面倒になるのを恨れて、そつとしておいた。

二

夏が來た。來吉は海岸に小さな家を借りて、ひとり移り住んだ。妻は少しく病んでゐたので、癒り次第あとで來ることになつてゐた。氣持の悪いとき、そんな小さな家に移つて不自由な避暑地の生活は厭だからと彼女は云つた。それよりも女中相手に東京で廣びろと暮した方が氣樂だからと云つた。それはさうだらうと來吉は鞄をさげて海岸へ來た。自炊同樣の不便を經驗して、來吉は妻の方が賢いなと寢ころんでゐた。

そこへ支波が、これも小さな鞄を下げて訪ねて來た。

「しばらくゐてもいいですか。」

「いいとも。」

來吉は、井飯だの辨當飯だのに飽いてゐたときだから、支波を相手に本當に自炊生活を始めようと思つた。七輪、バケツ、そんなものはあつた。土鍋などを買ひ足して、芯があつても、味噌汁の匂ひなども久しぶりで、うまい朝食が出來上つた。

「面倒になつたらまた辨當だよ。」

「大丈夫ですよ。ひとりだとおつくうだが、二人なら大抵やり切れますよ。」

食後の跡片づけが面倒で、二人でチャブ臺の上を眺めながら笑ひ合つた。こんなことは來吉は

妻にも手紙で避暑地からしらせてやつた。

來吉も支波も大分日に燒けてきた。

ある朝妻から手紙で、近近に行くからと知らせて來た。

——それに就て、支波はどうしても厭だから、自分が行くまでに居ないようにしておいて欲しい。

これが其時の彼女の注文だつた。來吉は、それを承諾して、彼女の來る前に支波に歸つて貰はうと思つてゐた。支波に云ひ出すのは何だか都合が悪かつたが、それよりも妻と支波とが落ち合つて何か持上る方が一層不愉快なのは知れ切つてゐた。明日にでも支波に立去つて貰はうと考へてゐると、翌日不意に——どうも不意だつた、近近といふのが明日のことだとは勘定してゐなかつたので、全く彼等には不意に、妻がやつて來た。支波よりも愕いたのは來吉だつた。妻に到つては、ありありと不平を顏に出してゐた。

支波はそんなにまで彼女から嫌厭されてゐるとは考へてゐないやうだつた。そこが彼女に云はせれば「鈍感——で蟲の好かない青年」なのかも知れなかつたが、來吉に辯護させれば、彼女が何故そんなに彼を嫌厭するのか譯の分らないところでもあつた。來吉はよほど支波を片かげに呼

んで、妻が來たから歸つて呉れと頼まうかと思つた。しかし妻が來たから歸つてくれ、は如何にも變だつたし、よしんば頼むにしろ、即刻歸つてくれとは云へなかつた。

「手狹になつたから都合で歸つてくれないか。——だが何も今すぐでなくたつていいよ。」

そんなことを云ひたかつた。しかし外に何とかいい都合はないかなと、そのまま夕方まで打捨てておいた。そして氣がつくと、妻がゐないのだつた。次の間の机の上に手紙があり、彼女は憤然として東京へ立ち戻つたことが分つた。

何が何だか、來吉はやたらに腹が立つて來た。どうとでも勝手に振るまふがいいや、——來吉は一思ひに、家風に合はんからもう永久に來てくれるなと妻に手紙をぶつつけようかと考へた。精神が異邦人同志だとしか考へられなかつた。

その夜來吉は妻に手紙を書いた。

——どう考へても曲はそなたにあるとしか考へられない。だから謝るつもりで、此手紙見次第に來るか。來なければ來ないでもいい。

簡單にそれだけ書いた。

支波は翌くる朝鞄を下げてさやうならをした。來吉は停車場まで彼を見送つて、何も云ふことがなかつた。支波は無器用な表情で頼笑みながら、窓と一緒にだんだん遠くへ離れて行つた。汽車が曲つて見えなくなつてから來吉は海邊の方へ戻つた。

妻は翌晩女中を連れてやつて來た。

三

機會があつて、來吉と妻とは支波のことなどを話し合つた。

「こなひだ支波の送つて來た菓子だつて、何も捨ててしまふことはないぢやないか。少し亂暴すぎるよ。」

「すみません。でも何だかあの人から貰つたりなんかしたくないものだから——。」

「その潔癖も時にとつては結構だよ。時と場合によつては僕もその種類の事は大賛成だよ。だけど何も支波の場合だけさうむきにならなくてもいいだらう。そんな原因何もないぢやないか。第一、僕がそのおつきあひしなくちやならないのは困るよ」

「おつき合ひなんて、そんなことなさる訣はありませんわ。」

「さう考へてゐられたのぢや、なほ困る。捲き込まれるのは、それぢや僕が悪いのかね。僕の身

勝手なのかね？」
「何もさう――。」
「あいつは鈍感かも知れないさ。圖圖しいかも知れないさ。しかし、僕はあれで見どころがある青年だと思つてゐるのだよ。好學の精神一つだつて、それにあの洒落氣だつて、さう打ちやつたものぢやないと考へてゐるのだがね。」
「そんなことを云へば、どんな人間にだつて取りどころはありますわ。」
「ない。ところがないよ。よく人はそんなことを云ふが、ない人間には全然ないよ。」
「さう？――」
「さうさ。」
「ぢや、取り柄のある青年と遠慮なく交際なさいよ。」
來吉は茫然として妻を見た。
「そんな莫迦な、そんな物の云ひ方てあるか。」
「だつて――」
「それや、支波に足踏みしないように云つてやつてもいいさ。そんなこと訣のないことだから。

だけど僕は――。」
來吉は、そのあと、云ひ續けようとしてちよつと躊躇した。云つてしまつたら妻は屹度怒るだらう、怒つてもあとで本當のところが分つてくれたら、それでもいいが、恐らく分つてくれないだらうとなると、無意味に怒らせ、何か不愉快なことを持ち上げられるのが厭だつた。彼は默つてしまつた。
「何？――どうなすつたの？」
「なあに、何でもない。」
來吉は妻の爲に友を失ひたくないと云はうとしたのだ。だが此場合、例として擧げる支波でもない氣がした、で、默つてしまつたのだつた。
「まあ友達なんか、別別に持つてゐたつていいぢやないか。何も共通に卓を圍む友達ばかりにしてしまふには當るまいから。」
來吉はそんなことを妻に云つておいた。
その日は朝から雨で、濱邊へ出かける日ではなかつた。しばらくして彼女は茶をいれると來吉に云ひかけた。

「どう、チエスでもしない？」
「あ、しよう。」
西洋將棋の、どつちかといふと不恰好の駒を並べたが、二人とも餘り上手でないので、直ぐ飽きてしまつた。ではといふので今度は六百ケンをやることになつた。退屈な折には彼等はよく六百ケンをやるので、もう相當に面白くなつてゐた。花札で二人きりで遊ぶには、ちよつと面白い遊戯だつた。
「や。一杯呑んだぞ。」
そんな出來役があつた。
「二杯とは呑ませないから。」
「その代り松桐坊主だ。」
初めは仕方なしに始めたやうなものだつたが段段興味が出て來て、二人とも不愉快な話を忘れかけてゐる時だつた。妻は何かのついでに云ひ出した。
「川島さんね、お家ぢや莫迦にされてゐらつしやるのですつて。奥さんでもお嬢さんでも、もし川島さんが邪魔になると、何處かへ遊びにいつてらつしやいて追ひ出すのですつて。すると、何

處へいらつしやるのか、おとなしく遊びにお出かけになんですつて。――」
「莫迦。」
突然來吉は手にした花札を目の前に叩きつけた。彼女の調子が「奥さんやお嬢さん」の態度に少しも批判を加へてゐず、云ひかへると是認してゐるのが癪に觸つたのだつた。來吉はいつもなら、「さうかね。」と或は云つて濟ましたかも知れなかつた。しかし其ときは恐ろしく義憤を感じてしまつた。何だか「女」の不心得を一ぺんに見せつけられたやうな氣だつた。
「なになさるの？」
「何も糞もあるものか。――」
「わけがわからないわ。」
「あ、厭なことばつかりだ。」
來吉は夕方の街へ飛出してしまつた。小雨の街は妙にひつそりしてゐた。洗はれた土は足駄の下で柔らかかつた。彼は物靜かな横丁を選んで、ぶらぶらと歩いて行つた。時折小雨が頰に降りかかつて快かつた。
時時家並の標札を見ながら、夏ももう終りなのを思つた。これ等の標札の多くがはがれて貸家

札に代るのも遠くないのだつた。避暑地の八月末は誰の目にも寂しいものに違ひなかつた。

彼はいつか停車場の前に來てゐた。停車場は時間の間(あひ)らしく、ゆつくりとしてゐた。突出た廂に雨をさけて、大山詣でらしい一團がてんでの姿勢でかたまつてゐた。型の如き白木綿の法衣のやうなものを纏つて、その白木綿の薄汚れたのも佗びしかつた。べた一面に捺された印形も、或ものは半ばはげてゐた。かういふ團體は大抵女が混つてゐて、女達は無遠慮に下等にはしやいでゐたりするものだが、此連中は不思議に男ばかりだつた。三十五六から五十五六位までの髯面が多く、誰れも默つて雨を見てゐた。一人、夏蜜柑を嚙んでは吐き出してゐた。

來吉はいつか此處へ送つてきた支波のことなども思ひ浮べた。彼は今度着く汽車を見て歸らうかなと思つた。誰でも折りにふれては「漂泊のおもひやみがたく」なるものなのであらうなど思ひながら。

（昭和二年）

海邊の町で

その日はいいお天氣だつた。だから私達もぶらぶら散歩に出たわけだが——。

私は妻に云ひかけた、

「いいお天氣だね。暖かくて——。」

だが妻は私に答へる代りに——なぜなら、私が「いいお天氣だね、暖かくて——。」さう云つたのは、さつきからもう三度目ぐらゐだつたから、——彼女は、私には輕く同意のうなづきを見せただけで、連れだつてゐる華子夫人に、

「これが東京だと、春さきは埃りぽくてあたし厭よ。でもここは、——」

何か話しかけてゐた。

女達は二人並んで歩いて居り、私は彼女たちから二間ほど前を、隔つて歩いてゐた。——私達がある街角へ來かかつた時だつた。私は向うから一台の馬車がやつて來るのを見た。馬車は形ばかりの幌をかけてゐるに過ぎないので、どんな人が乘つてゐるかは、正面と側面とからなら、すつかり見てとることが出來た。馬車には三四人乘つてゐるらしい遠目だが——何よりも先に私は

そのなかの一つの白い顔が、ぢつとこつちを見てゐるのを感じた。その顔は、私に頬笑みかけてさへゐるやうに感じられた。だが、誰だか、不意すぎて、ちよつとは分らなかつた。――馬車はやがて私達を通り過ぎてしまつた。その人と、子供二人と、老婦人と、四人乘つてゐた。

「見たやうな方ね。」

「綺麗な方ね。」

「しやれてるわ、馬車なんかで、ゆつくりと。――」

「ほんと。――」

女達は過ぎ去つた馬車をまだ見てゐた。

「誰だつたか知ら。見たやうな方ね。」

華子夫人はもう一度云つた。それが私には、あんなに知つてゐる筈の人なのにと、をかしかつた。

「末松夫人ぢやありませんか。」

私はきつぱりと云つた。

「末松夫人？　富子さんのこと？」

「さう。」

「嘘、何が末松夫人なものですか。」

妻もそれに云ひ加はつた。

「さうよ、ちよつと似てゐるかも知れないけど、別の方だわ。」

云はれてみると、私にもすぐ、思ひ違ひしてゐることが分つた。確かに末松夫人ではなかつた。大變な間違ひだつた。餘り變な間違ひ過ぎるので氣まりの惡さよりも爆發する笑ひの方が先だつた。

「ああ違つてゐた。あの人だ。――」

「さうでせう、違つてゐるでせう。誰？　御存じなの？」

「あの人、水原さんさ。」

「水原さん、まあ。」

妻は驚いた聲をあげた。

「水原さんなの？　本當？　なら、もつとよく見ておくのだつたのに。――」

「水原さんて？――」

華子夫人が訊ねた。妻はずばりと返事した。

「この人の、戀人よ。」
「戀人？　まあ大變。――」
華子夫人は私をからかつた。
「それを見違へるなんて。」
「どうも申訣ありません。その程度しか知つてゐない人だから、何とも――。」
私も、妻にあけすけに云はれて、多少參つてゐないでもなかつたので、冗談めかしてしまつた。
華子夫人は、私に笑ひかけながら、
「でも、」と云つた。「でも、あの方なら及第よ。勘辨してあげますわ。だつて、何時でも、あなたの好きなて方、屹度變な人ばかりなんですもの。あの方なら立派なものだわ、だから勘辨してあげますわ。」
「へえ、そんなものですかね。」
私が時折、雜誌の口繪などを見ながら、この人はどうです美人ですね、などと言ひ出すのが、大抵華子夫人の趣味と合致した事がないので、さうからかふのらしかつた。
「それにしても賴りないわね、戀人を見違へるなんて。」

妻は華子夫人を顧て笑つた。
「いつ戀人だなんて云つた？」
「いつでも云つてるぢやないの。」
「云つてるものか。」
「云ひ過ぎてるわ。」
華子夫人が口を出した。
「およしなさいよ。戀人なら戀人でいいし、見違つてもそれもいいし、どうせ――。」
「叶はない。どうせ、でせうよ。」
「ほ、赭くなつた。素敵素敵。――」
女達は一緒に囃し立てた。
だがどうして見間違へたのか、私は自分の不覺が何となく女達に恥かしかつた。もう少し近くで見たのなら決して見違ふ筈はないのだが、――。
「でも、栗原さん。」華子夫人が私に呼びかけた。「戀人が挨拶もしないなんて變ね。」
「そこがいいところですよ、尤も、先方ぢやちよつと目禮しかけたのだけど。――」

「嘘ばつかり、うぬぼれてるわ。」
妻がさうやつつけた。
「嘘なもんか。それは確かだよ。だけど肝心の僕がぼんやりしてゐたものだから。——」
「ぼんやりだから、さう見えたのでせう。そんな點鈍感だから。——」
「そんな點鈍感だつて？　まあ、さうかしら——。」
華子夫人は妻を見た。妻は笑つた。
「それや鈍感よ。」
「まあ、勘忍して頂戴、お浚ひされちやたまらないわ。」
「え？　なに？」
「むかし、そんなことがあつて、もどかしかつたといふのぢやないの？」
「あら、ひどいわ。」
私はいつか彼女達から離れて、また以前のやうに二間ほど先立つて歩いてゐた。女達の話は、水原夫人を中心にして、いつまでも續いてゐた。
「可愛らしいお子達だつたわね。お嬢さんでせう？」

「さうね、二人とも七つ位かしら。」
「双生児ぢやない？　それとも年子かも知れないわ。」
「大へんね。——割に派手なお召しものだつたけど、ぢやもう可なり——」
「さう、二十八九でせうよ。それとも三十越してゐらつしやるかしら。」
「まさか。」
私は振り返つた。
「さう惡口いふのはおよしなさいよ。」
「お氣に障つたの？」
「無理もないわ。」
「でもまあ默つて歩いてゐらつしやい。さつきから見てゐると、とても嬉しさうな歩きぶりだから。——。」
女達は口ぐちに云ひ返した。私は應戰した。
「身も心も輕さうな——。」
「憎らしい。默つて歩いてゐらつしやい。」

私は彼女達の目を背なかに感しながら、水原さんを想つて歩いてゐた。やはり、冗談でなく身も心も輕かつた。

「でも可なりいい趣味で、惡くなかつたわ。」

「さう。お孃さん達の洋服もちやんとしてゐたし――。」

「まあ及第ね。」

「ぢや勝手に戀人にされてゐても仕方がないわけね。」

「都合のいい理窟ね。」

女達は、それこそ都合のいい、勝手のいいことばかり話し合つてゐた。しかし、ともすると、それは惡口に、惡口でない迄も、何か水原夫人の缺けたところを探す話題になりがちだつた。さういふ話題で彼女達が一致すると、會話は急に生き生きとするやうだつた。

私は彼女が何を喋りつづけてゐようと構はなかつた。久しぶりで水原夫人に出會へて、ゆつくり馬車の行衛を考へながら歩いてゐるだけで十分だつた。

華子夫人に別れて二人きりになると、妻は急に息をはずませて訊いた。

「本當？　え、本當？」

「何がさ。」

「さつきの確かに水原さんなの？」

「それか、それは確かだよ。」

「あ、癪だわ。やつぱり本當だつたの。」

「癪もなにもないぢやないか。僕一人の勝手な話なんだもの。向うぢやちつとも知らないことだもの。」

「向うの知らないは問題ぢやないのよ。あ、癪だ、――」

さつき馬車と行き違つた折は、私は水原さんを末松夫人と見違へたりしたので、それに華子夫人もゐたので、妻の氣持も隨分輕いものらしかつた。しかし、段だん時間が經つほど、何かしら妻の胸にはつきりしたものが、むしやくしやと押し寄せてくるらしかつた。嘘が本當のやうな形を形ちづくるものらしかつた。妻は多少不機嫌になつてゐた。

「男て、勝手なものね。」

「そんな古くさいことを云ふなよ。――だつて、遠くから仄かに誰かを想つてゐるなんて、人間

のいいところぢやないか。それに僕は熱のない男だし――。」
「だから勝手なものだわ。そんなこと、いざとなつたら、どうなるか、分つたものぢやないわ。――」
「ふん、そんなに實際的に見えるかね。」
家に歸ると、妻はやさしかつた。
「これからは、あまり水原さん水原さんて云ふの、止して頂戴よ。」
妻には水原夫人の姿がはつきりと燒きついたやうだつた。
「いままでだつて、そんなに云ひやしないぢやないか。」
「云つてたわ、目の大きい人を見ると、丸で水原さんだとか。――そのたんび丸で橋のたもとのダンテみたいに熱つぽい目をしたわ。」
「そいつは大したことだ。」
「そら、もう嬉しがつてゐるんだから。――」
「ぢや、そんな風に思へるのなら、この話はもう止さう。」
「え。よしませう。――だけど、一たい水原さんと何の程度に懇意なの？」

「懇意も何もありやしないよ。たつた一度お辭儀しただけだから。」
「本當？」
「本當さ、僕の方で恥しい位ほんとさ。」
「さうなの？　何だか怪しいけど。」
「買ひかぶらないでくれ、川柳になつちまふから。――」
ある朝、私が食事に降りて行くと、妻がにこやかに話しかけた。
「大變よ。知つてゐらつしやる？」
「何だい、だしぬけに。」
「とても大變。水原さんのことよ。」
「何だ。そんなことか。」
「そんなことかつて、とぼけなくつたつていいわ。――御存じなの？」
「何をさ。何も知りやしないよ。」
「ずゐぶんな噂なんですつてね。」
「ぢれつたいね。何の噂がさ。」

「水原さんの戀人の噂。――」
「うん。僕のことか。」
「莫迦ね。――冗談でなしに大變なんですつてね。誰だか知つてゐらつしやる？」
妻はいたづらさうな目つきで私をぢつと見た。私も何故か口のあたりが强張るやうに感じた。私は水原夫人と水原氏とがあまり仲のよい方ではないらしいといふことは聞いてゐた。しかし其處にもう第三者が這入つてゐようとは夢にも思つてゐないことだつた。それだけに妻のいふことは、まるきり嘘ぢやないかと思はないではなかつたが、何か嘘ぢやないらしいといふ氣が一方でひどく强くきた。私には噂の相手といふのはてんで心當りもなかつた。しかし知らないといつて妻からそれを教へられるのは沽券の下り過ぎるやうな恥しさだつた。で私はあてずつぽうにいつてみた。
「誰がそんなことといつてるのか知らないが、もう古い話だ、そんな噂なら。」
「さう？　知つてらつしやるの？　ぢや誰だか仰しやつて御覽なさいな。」
「いつたつていいけど、人のことなんか。」
「あんまり人のことでもないぢやありませんか。あなたの戀人の戀人の話だから、とても緊張する話ぢやないの？」

「若しほんとならね。だけどただ噂だからね。」
「内心まゐつてるくせに、そんなに輕く云はなくつてもいいわ。誰だか知りたいんでせう？」
「知つてるよ。」
「ぢや、仰しやいな。」
私は出鱈目に云つた。
「音樂家だらう？　今外國に勉强に行つてゐる。――」
「まあ、知つてゐらつしやるの？　そいで何ともない？」
「あるもないも、それは噂だけだもの。」
「ほんとに？」
「よしんばほんとでも、僕の氣持は僕の氣持さ。」
私はあてずつぽうがいきなり當つたのに、自分で意外すぎてしまつた。妻の前で辛うじて自分が落付いてゐられたことは、幾分の慰めではあつたが、しかし實際そんな噂があるのかと知ると、やはり不愉快な、暗憺としたものにひしひしと沈められた。ただかりそめに、その名を口にして

ゐるほどの水原夫人ではあつたにしろ、こんな話はどうも愉快でなかつた。私は妻と輕く會話を運んで行きながら、ともするとぼんやりつまづきさうな自分に氣が付いてゐた。

「外國まで追つかけて行きさうだつて、ほんとかしら？」

「まさか、そんな人ぢやないだらう。」

「直ぐさう辯護なさるの。」

私は、はつと思つた。

「さうぢやないけどさ、なるべく物事を無事平穩に考へといた方がいいさ。——だけど誰なんだい、そんなことといつて寄越したのは？」

「誰でもいいぢやないの。まるであなたからは見當のつかない方からよ。それだけにずい分噂は高いものと——。」

「ぢやまあさう承知しておかう。」

此時から妻は又水原夫人の名を心易く口に上すやうになつた。私にしても却つてその方が氣樂で、遠慮なく妻に水原夫人の名で甘えることが出來て便宜的だつた。内心、時折水原夫人に激しい憤怒を感じながらも。——

私は此間水原夫人が馬車に乘つて何處へ行つたかを知つてゐた。その日は土曜日だつた。彼女は二人の子供を伴れて海岸のホテルへ食事に行つたのだつた。私の解釋では、週末には東京から子供を呼び寄せ、樂しい食事と美しい空氣とで月曜の朝までを過すのに違ひなかつた。

彼女がホテルへ行つたことを知つた私は次の土曜日にはそつと食事に出掛けてみた。しかし私は自分の判斷に不信用を拂つただけで歸つて來なければならなかつた。その次の土曜には口實がなかつたので、私は妻を伴れてホテルへ行つた。そして妻から、御馳走樣といはれただけで、私は滿ち足りずに歸つて來た。それでももう一度試みる氣を私はまだ失はなかつた。ちやうど片付けなければならない仕事を云ひたてて、私は次の土曜日にはホテルへ泊ることに妻を承諾させた。私は小さなスウツ。ケエスを提げて、剃りたての顎をホテルへ持つて行つた。だが食堂へ出た私は又しても人のゐない澤山のテーブルを見に來ただけだつた。客は勿論幾組かはゐた。デンマーク人の兄妹、背の高いスコツトランド人と、何をしてゐるのか分らないドイツ人とその妻の日本人と、いや、もつと手近な日本人が大勢、二人の子供を伴れたのさへゐるにはゐた。一人のモーニングの紳士が文金高島田の、何のことはないホネムーンの出發を廣告して大きな異彩を放つて

さへゐた。だが私にはがらんとした、——興味のない見物ばかりだつたとは云はない、しかし給仕人のお辭儀からさへ、かすかな嘲笑を抽き出すほどの私はおどけた奇術師になつてゐた。

まだ日曜がある。——私はその日曜に——何を語る必要ももうないだらう。

（昭和二年）

古い新芽

その日は千尋の誕生日だつた。だが、千尋は格別誕生日のお祝ひをしようとも思つてゐなかつた。しかし、ゑち子は朝、目が覺めるとから、上機嫌に、

「けふはチヒロの誕生日。」と節をつけて唱つてゐた。

「……みんなで仲よく遊びましよ。」

それで午後になると、彼等は銀座に散歩に出かけた。何か記念の買物をして、夕方に何處かで晩餐をとるといふ手はずだつた。

凡てはその通りに終つた。買物は、ゑち子は小さな手提げを買つた。そしてその代金は千尋のポケツトから出た。千尋は、額縁を買つた。その代金はゑち子が拂つた。どちらも小さな金高だつた。

「額縁はお祝ひに貰つた訣だね。僕は此中に鳩を入れるつもりだ。」

鳩といふのは、徽宗皇帝の鳩の圖の寫眞だつた。敦厚でいい圖柄だとひどくゑち子が好んでゐ

るので、彼の畫帖から一枚抽いて入れるつもりだつた。初の圖は、初め彼女は筆者が誰であるのかを知らずに、

「豐かな、大樣な繪ね。」と讃めてゐた。

「徽宗皇帝だよ。」

「皇帝？　道理で屈託のない繪だわ。」

彼女はそんなことをいつてゐた。

額縁が少し嵩高な荷で閉口したが、紙包みを抱へた彼等はいそいそと歸途に着いた。そのころから小雨が降り出した。

「いい御誕生日だつたわね。もう歸るばつかりだから、少しぐらゐ降つたつていいわ。」

彼等は郊外に住んでゐた。雨は、郊外電車から下りた時分にはもうかなり足もとを惡くしてゐた。

彼等が原を横切つて家の傍の空地までくると、千尋は足もとで鳴き聲が、……生れた許りの犬の子らしかつた。くうくうと、哀れつぽく鳴く聲を聞きつけた。

「おや、犬だ。捨犬だよ。」

さう彼がちゐ子に知らせると、小狗は一層鳴き聲を立てて、もうちゐ子の踵にまつはりついてゐた。

「可哀想に。」

だが、拾つてやるわけにもゆかなかつた。現に飼つてゐる犬も、これと同じやうな徑路で拾ひ上げた捨犬だつた。さうさう捨犬を、……どうせ駄犬ばかりを飼ふ氣にもなれなかつた。で、そのまま知らん顔で行過ぎようとすると、小狗はよちよちと追つかけて來た。さうして、玄關に上る石段に小さな前足をかけ、懸命に上らうと努力しだした。それを見ると、そしてその哀れつぽい鳴き聲を立てられると、びしよびしよと降る雨の中へ捨つぱなしにしておけなかつた。ゐち子は手袋のまま小狗を拾ひ上げてしまつた。

「可哀想だから、飼つてやつてもいいな。」

千尋もさう同意した。犬は玄關の三和土の上におろされ、そこで牛乳を貰つた。目も鼻もまだよくは利かないらしく、それほどの子供だから牛乳の皿の中へ前足を二足とも踏み込んで、牛乳だらけになつた。

チョコレエトの函と、その中に詰めものに使つてある鉋屑とが、彼女の……仔犬は果して牝犬

だつた、どうせ捨犬は牝犬にきまつてゐるやうなものだ、此前拾つた犬も牝だつた。……彼女は、新らしい寢床の中に、……胃袋も滿ちたし、雨も、もう降らない屋根の下だし、段段暖かくなつて　眠りだした。

「いい具合だね。此按配だと、今夜あまり、きいきい鳴き立てられずに濟みさうだ。」

「さうね。捨て犬もいいけど、夜通し鳴かれるのは、ほんとに閉口ね。」

それでも夜中に一度鳴き聲で起されなければならなかつた。また牛乳をやつて、それで朝まで無事だつた。

あくる朝、よどみなく照る日の下で、彼等は食卓につきながら、……けさももう目の覺めるとから、二度も三度も、かまひ過ぎるほど構つた小狗のことを話し合つてゐた。

「ほんとにいいお誕生日だつたわね。犬まで拾つて……あれで、死ぬ命が一つ助かつたわけだし。」

「さうさな。ところで犬の名だな。……」

「きのふは、マアチンマスだから、聖マアチンマスだから何か……さうね。マアチンてどう？」

「マアチンか。それでもいいね。」

小狗はマチ、マチと呼ばれ出した。

庭には、以前からゐる犬と、新しい犬と二匹が、段段馴染み、小狗のざれかかるのを迷惑さうに受けながらも、大きい方のも犬仲間を持つたことを嫌がつてゐるやうでもなかつた。

二

千尋の誕生日のあとおよそ半月目が、ゑち子の誕生日に相當してゐた。

「もうおき、わたしの誕生日ね。どんなお祝して下さるの。」

「さあ、どんなつて。まあ同じやうなことだね。飯でも食つて、買ひ物でもするより外に何うつてしようもあるまい。」

千尋は、どつちかといふと、誕生日などはどうでもいい方だが、ゑち子は隨分樂しみにしてゐるやうだつた。千尋の誕生日が氣持ちよくすぎただけに、彼女は彼女の誕生日を、一層愉快な、いい日に、それこそ「仲よく遊び」たい樣子だつた。その期待が大きかつただけに、誕生日がずつと近づいた時分になつて、彼女の氣分がとかく勝れないのを、氣にしだした。

「けさも食べたものを戻しちやつたの。」

さういふ日がちよいちよいあつた。

「よつぽど胃でも悪くなつてゐるのね。これぢや折角どんな御馳走して下すつても、食べられさうにもないわ。殘念ね。」
「うん、それや殘念だ。」
「嘘ばつかり。厄介でなくなつて、實は大贊成なんでせう。」
そんな冗談をいつてゐるうちはよかつた。ある朝、彼女の吐いたものに、少し血が混つてゐたので、彼女は、千尋も勿論驚いた。
「出血ね。また胃壁が破れたんだわ。」
急に醫師が迎へられた。懸りつけの醫者は、
「なに、また食べ過ぎでせう。」
さう氣輕に云ひながら診察を始めたが、聽診器を當てると、「これはいかん。」と云つた。
「けふだけぢやないでせう。これつくらゐの熱がずつと出てやしませんでしたか。」
「ええ、このくらゐの熱、ずつとありましたけど、胃の悪い時にはしよつちゆうだし——。」
「それがいかん。これや胃の熱ぢやないです、少し注意せんといかんですな——寢汗はかきませんか。」

「いいえ、別に。」
「うん、何にしても、少し養生せんといかん。」
醫師の歸つた後、家中は急に空氣が重くなつた、全然そんな懸念を持つてゐなかつただけに——醫師が歸りしなに、
「なに、大したことはありませんよ、ちよつと驚かしておかんと養生せんからね。」
さういつたのも、簡單に氣休めとは、取れなかつた。貰つた處方を藥に代へてみると、かすかにケレオソートの匂ひが立つた。
「いやね、こんな藥——。」
「でも、仕方がないさ。——だけど、何となく儚いね。」
「はかないわ。御馳走どこぢやなくなつちまつたのね。何て嫌な誕生日なんでせう。」
彼等は、その郊外にこれ以上もう一日も住んでゐるのが嫌な氣持だつた。醫者は、
「なに、ここにゐて大丈夫ですよ。引越しなどしない方がいい。ごとごとせん方がいいですよ。」
さう云つてゐたし、彼等も、病氣がそんなに大したものとは考へなかつたが、唯氣持が一日も早く、廣廣とした海邊へ移り住みたくなつてしまつた。

「必要の有無に係はらず、この際越してしまはうね。」
「それがいいわ。」
「氣持が違へばそれだけいいんだからね。嫌だと思ひ出した處に――我慢してゐるのが一番いけないだらうからな。」
彼等は、相談して逗子に家を探す事にきめた。そして、そこに住む友達に、直ぐ手紙を出した。二三日中に行くから、心當りを御用聞きにでも聞いて置いてくれ、そんな文意だつた。
「なにしろ、とんだ誕生日だよ。だが、本當はいい誕生日かも知れないよ。御馳走を考へて、そして胃の悪いのを氣にし出してそのお蔭で早くわかつたやうなものだからね。まあ、本當に今日から誕生の仕直しをするんだね。」
病氣だといはれてから、急に元氣がなくなり、しほれ返つたゐち子は、ぼんやり千尋の云ふことを聞いてゐた。
逗子の川田からは、兎も角檢分に來給へといふ返事が、折り返してあつた。

三

庭木戸をあけて、留守かな、と廻つた縁側に、――川田は日のあたる縁側で、雜誌を讀んでゐた。
「いやにひつそりだから、東京へでも出かけたのかと思つてゐたよ。」
「うん、でも、けふは君が來さうだつたからさ。ところでどう、フラウ?」
川田は直ぐさう聞いた。
「うん。大した事もないんだけどね。まあ海岸に來るに越した事はない。そんな氣がするしね――第一、今の家、もう飽きちやつたから。」
「大した事がなけりや、いいね。家の奴も心配してたよ。」
「さういへばどうだい、フラウ?」
千尋も同じやうなことを訊ねた。川田の妻君も惡くて、そのため、海岸に住んでゐる彼等だつた。
しばらくすると、買物に行つてゐた川田の細君も、歸つて來た。
夫れで、今度は細君を留守番に殘して、千尋は川田の案内で、家を見に出かけた。
隨分空家はあるやうで、だが氣に入つた家は容易にないものだつた。川田は一應彼の見當つけ

て置いた家を案内し盡すと、今度は荒物屋とか、雜貨屋とか、八百屋とか、さういふ家へ、手當り次第に飛び込んで、空家を聞いてくれた。だが、どれを見ても、卽座にきめようと、飛びつくやうな家はなかつた。仕舞ひには、二人ともくたびれてしまつて、

「なにしろ逗子は、元來家數が知れたものだからね。」

二人で、町の戸數のとぼしさを攻擊した。歸ると、川田の細君は、珈琲を沸かしてゐてくれた。

「どこか、お氣に入つたのありまして？」

「どうも、これだ、といふのもなくつてね——。」

「ほんとに、借家探しはいやなものですわね。」

「ああ、くたびれた。おい、いい匂ひがしてるぢやないか。珈琲でも貰はうか。」

さういつて川田は、緣側にごろりと、——まぶしく射す日に、目を瞑つた。十二時の笛が鳴つた。

「仕方がないから、鎌倉を探さうか。」

「うん。僕もさう思つてたんだ、いま。」

さう云つて、川田も起き上つた。それに力づいて千尋は早速頼んでしまつた。

「ぢや、くたびれついでだ、一息ついたら、鎌倉へ行つてくれよ。」

「ああ、一ぷくしたら出かけよう。」

だが、鎌倉も、——いい家は高過ぎて、手ごろの家賃だと、汚いか狹いか、卽座に手金をうつほどの家は中中見つからなかつた。

「ないもんだね。いやんなつちやつた。」

「嫌になつた？　僕の方がよつぽど嫌になつたよ。」

川田はさう答へて、笑ひ出した。

「まあ、厄介ついでだ。もう少しつき合つてくれ。そのうち、いい加減のとこで、妥協しちまふから。」

「さうだよ。好い加減のとこで妥協しちまはなくちや。——さういきなり好い家もめつかるもんぢやないさ。また越し直す積りで、兎に角落付いて仕舞ふんだね。その上で、ひまひまに、ゆつくり探すさ。大抵、皆さうするんだよ。」

「さうだらうね。さうでもしなきや。——」

「さうだよ。だから、少し氣の利いた家が空けば、さういふ土地にゐてねらつてゐる奴が、直ぐ越し直しちまふんだよ。二三度越し直して、――い〻家に住んでる奴は、大抵さうして越し當てた連中だよ。」

「ぢや、そんなことで、いい加減に妥協するか。」

彼等は、やうやく日のかげり出した町をまたどんどん歩きだした。

「へたばつたなあ。」

佐介の奥まで來て、それもあんまり氣に入らない家であつた時、川田はさう仰山にいつて、いきなりしやがんでしまつた。

「何しろ、かう歩いたのは初めてだぜ。」

「お互ひに近頃珍らしいや。――だけど、ついでだ。さつき米屋で聞いた海岸の家ね。あすこをもう一軒見てみようや。そして、ホテルで晩飯にでもしよう。」

「ちえつ。ホテルぐらゐで釣られちや、敵はないな。」

お互に疲れた足で、暮色の迫つた町を、海岸の方へ歩き出した。

四

ホテルの食堂は、晴れがまし過ぎる程、ひつそりしてゐた。客は、四組を越えてゐなかつた。その中に、知つた顔を見出した意外は、千尋を驚かすに十分だつた。川田も隨分驚いた樣子だつた。二人は、遠くから目禮して椅子に着いた。

「驚いたね、あんな人に會はうとは。」

席に着いて、川田の先づ口にしたのはさうだつた。

「ここへ食事になんか、滅多に來ないんだのに、それだのにいきなり出くはすのだからな。――今日は變な日だよ。やたらに引張りまはされるし、擧げ句の果ては、あんな人に出くはすし。」

「あの人、誰れだい？」

「あの人、誰れ？」川田は反問した。「誰れつて、君もいまお辭儀してたぢやないか。」

「うん、お辭儀はしてたがね、それはまた別だ――。」

「別？　ぢや、も一人の人にお辭儀したのかい。」

「まあ。――で、あれや誰なんだい。見たやうな氣もするが。」

「きつと、會つてるよ。あれ、三村の妻君だよ。」
「ううん。三村の妻君て、あの人か。」
さういつて、千尋は改めて、またその卓を見た。川田は妙に笑ひながら、
「僕はまた」といつた。「君も三村の妻君に挨拶したんだと思つた。——ぢや、も一人の人、知つてるんだね。——今度はこつちで聞く番だ。あれ誰れだい？」
「いいぢやないか。」
「變な奴だね。よくないよ。誰れだい？　隱す必要もないだらう。」
「隱すなんてこともないさ。ただ、君に敎へたくないだけだ。」
「いよいよ嫌な奴だな。——歩かすだけ歩かしといて、一體なんだい。」
「ぢや、度胸をきめるか。」
千尋は心持ち、川田の方へ身體を近寄せながら、
「廣田つて人だよ。」といつた。「もうお孃さんぢやない。」
「それんくらゐは見當がついてたがね。うんうむ、さうか。」
「さう見るなよ。」

しまひに千尋が注意するほど川田は凝つと二人の方を見てゐた。
「ちよつとハイカラ、——いや、生意氣だね。あのくらゐの婦人が、二人だけで食事してるなんか。」
「その生意氣なところに、好意を感じるだらう。」
食後、彼等は、バアの椅子にうづまりやたらに煙草をふかしてゐた。
永い沈默の後で、川田は云つた。
「だから僕は、逗子にゐるんだ。あの人がゐるから、僕は鎌倉に住まないんだ。だから——」
千尋は、急に遮つた。
「よし、分つた。——實は分つてないがね。分つてないにしろ、後は訊かないよ。」
「ふん。その代り、僕にも訊くなといふのか。」
「まあさうだ。こんな事は、云ひたくなる時まで云はない方がいいものらしいからな。」
「そんならそれでもいいと、——だが、厭な奴だ、君は。」
「厭かも知れん。だがどうも仕方がない。」
二人は顏を見合せた。そして、一緒にマツチを擦ると、默つて笑つた。

「だが、――」
川田が何か云ひかけやうとした。それを千尋は、手を振つて抑へてしまつた。
「いいよ、もう。今日はくたびれてゐる。こんな晩は默つてるがいいんだ。僕も一休みしたら、――この後は終列車だね。それで歸るよ。」
「歸る？　それでもいいが、どうだい、今夜泊つたら？　そしたら僕も、あした出かけて來て、もう一日探してやるよ。」
「ああ、そいつも有難いけどね。だけど、まあ、今夜は歸らう。そして、改めても一度厄介になるよ。」
「さうか。そんなら――」
それからしばらくして、彼等はホテルを出て、發車までにはまだ十分に時間があるので、ぶらぶら歩き出した。その途中、一軒の肉屋の軒下で、千尋は「貸家あり」の札を見つけた。
「貸家札にはひどく鋭敏になつちまつたね。」
いひながら、二人はその白い札に近寄つて行つた。
「これは割に手ごろらしいよ。」

「どうだい、そんなら、やはり今夜泊る事にしちや。」
千尋も、幾分同意しかけた。だが思ひ切つて、斷つてしまつた。
「今夜は歸る。それで君、濟まないついでだ。あしたでも、この家、見といてくれないか。その上で、好ければ電報くれ給へ。そしたら直ぐ來るから。でなければ、二三日うちに、出直して來るよ。」
「賴むことだけ、遠慮なく賴みやがんなあ。」
「さう思ふか、僕もいま、自分でさう思つてゐた處だ。」
川田の下りを見送つてから、千尋は自分の列車に乘つた。彼の疲れた頭に、ゐち子のこと、家のこと――だが忽ち、それらを追ひのけて、廣田の細君が、彼の頭を占領してしまつた。
――あの人がゐるから、僕は鎌倉に住むのが厭なんだ。
川田は三村の細君についてそんなことを云つた。さう云つた瞬間の川田は、何か晴れやかな、花花しくさへあるものを示しかけてゐた。だが千尋自身は？――彼は、廣田の細君について何をいふことができるのだらう。彼は、およそ川田と反對のことをいひかねない、――それより仕方のない自分であるやうな氣がしてゐた。

何が起らうと——むしろ何か起ることを望んで移り住まうとしてゐるのではないのか。千尋は、——。

その刹那、どしんと彼は愕かされた。彼の乗つてゐる列車が急停車したのだ。車の屋根にどしんと重いものが打撃し——それは、太い架線が切斷したのだとすぐ分つた。

「何です。何です。」

通りかかつた車掌は、たちまち乘客の質問攻めにあつた。

「誰か電線泥棒をしようとしたらしいのですがね。まだよく分りません。今、急援を頼みました。」

窓外の闇には、太い電線が鋭く光つて波打つてゐた。

「どうかどなたも、一歩もお動きにならぬよう御注意願ひます。切斷した架線に觸れると黒焦げになりますから。」

そんな注意を、車掌は觸れて廻つた。

「どの位かかるかね？」

車掌は、二時間位はかかるといつた。

「二時間？　ぢや東京へ着いたら電車もないね。」

誰れか乘客がさういつた。

千尋はどうでもいいと思つてゐた。夜の明けるまで、この列車にゐてもいいと思つてゐた。修繕は、遲遲としてゐた。本當に夜明けまでかかりさうでさへあつた。が、やつと——時計をみると午前の二時に近かつた。列車は、ゆつくり動き出した。

品川で、驛員の世話してくれたタクシに乘り、やつと千尋の歸宅したのは四時に間もなかつた。

「まあ今時分。」

戸を開けてくれたゑち子は目を丸くした。

「僕も驚いたよ。」千尋はすつかり出來事を話した上で、「何だか悪い日だつたよ」と云つた。

「で、どう家は？」

「家もさ、それも何だか悪い日で、これといふのが見つからなかつた。もう一度、出直す必要があるんだ。が、いづれ話す。ひどくくたびれてゐるから。——」

翌日千尋は歸り途にみた貸家札の事をゑち子に話した。

「――よささうな家だからね。川田に見に行つてくれるように頼んどいたよ。いい加減のところで決めるより仕方がない。」

五

三日目に、千尋は川田をまた訪ねた。ゐち子の注意で提げて行つた菓子箱を、出しながら訊いた。

「どうだつたい、こなひだの家――。」

「あれね、一足違ひだつたのだよ。借りられちまつたのだ。」

「さうだつたかい。やはりいい家は誰がみてもいいんだね。」

「それがね、借りられただけならいいが、妙な人が借りたのだぜ。廣田つて人が――てつきりあの人だぜ。」

「そんなことあるもんか、名前だけ同じなんだらう。いい別荘も持つてゐる人だし。」

だが千尋も、内心或はと思つた。何かの都合で借りたのかも知れない――。

「だからさ、肉屋のおやぢいはくさ、廣田さんて、御別荘のある方ですがね、御改築になるんで

云云――てつきりさうだよ。どうだ、驚いたらう。」

「ふうん、さうかね。」

妙なことがあるものだと思つた。しかし借りられてしまつたのなら仕方がない、借り主が分つてゐるだけに、その方がいいやうな氣もした。

「だが、こなひだはよくよく妙な日だつたね。」

川田はさういつた。

「次手だ。けふも、妙な日にしてしまふか。」

さう千尋は應じた。彼等はまた家を探しに出かけた。

「おい、この家だよ。」

扇ケ谷で、川田は不意に千尋に路ばたの一軒の家を指し示した。

「さうか。」

千尋も直ぐ分つた。見つきも惡くない家だつた。

ホテルでもし會はなかつたら――。

千尋は、彼の平靜でありかけた心が、徐徐に動き出すのを感じた。假りに會つたにしても、そ

れだけですぎたら――さうも思つた。ホテル、貸家、何、何、生起し滅却するもの、――どうとでもなるがよからうと千尋は思つた。

何が起らうと、それは知つたことではない、今は、彼はるち子のために新しい家を探してゐるだけだと思つた。

（昭和二年）

影

三村があまり默つてゐるので、細君が饒舌になつた。
「ほんとにくたびれてゐらつしやるのね。」
「あ。」
「頭が痛いのぢやない？」
「うん、まあ。」
「アスピリンでも召し上つたら？」
「うん、そんなでもないよ。」
彼は傍らの湯呑を口に持つて行つた。
「あら、そのお茶もう冷えたでせう。紅茶入れませうか。」
「ああ。」
細君が側の鐵瓶を沸くやうにし、紅茶の仕度をしに退くと、彼はぼつとし、一度やめかけた茶を飲んだ。茶は冷く、喉に快かつた。

彼はさつき疲れた顏付で歸つて來た。玄關で帽子と外套を細君に渡すと、默つて書齋に入つた。

ついて來た細君が茶を入れて話しかけた。

「今日は何處へ行らしたの？」

「方方散歩して來たよ。」

「さう。で、くたぶれた顏してゐらつしやるのね。方方て、何處へ行らしつたの？」

「竹中の所やなんか。」

その拍子に彼は細君をぎろつと見た。

「竹中さんとこ？　さう。何か變つたことあつて？」

細君から目をそらせて、三村は默つてゐた。それで細君が饒舌になつたのだ。

紅茶の仕度をして來ると、まだ細君は饒舌だつた。ねぼりはぼりするやうなのが三村をだんだんいらだたせた。しまひに彼はいつた。

「あまりしやべらないでくれ。」

それだけいふと次の言葉がむつと口をついた。「書齋は默つてゐる所だ。」

細君は不意打ちに、急に泣きさうな顏になつた。そして默つて次の間へ退いた。三村はちよつ

と耳を澄して、細君が泣いてゐやしないかと思つた。が泣聲は聞えなかつた。暫くして細君が雜誌か何かの頁を繰るのが聞えた。

三村は自分で紅茶をついで飲んだ。

その晩中、彼は書齋に籠つて、長い手紙のやうな、或は小說ともつかぬものを書き出した。書き終つたら彼はそれを細君に見せる決心だつた。細君の讀み方一つで、彼は竹中にも讀ませる覺悟だつた。恐らく竹中にも見せることになりさうな氣がした。

細君に讀ませる時に、かう注意するつもりだつた。

「これは竹中から俺宛に來た手紙だ、そのつもりで讀むのだよ。いいか。」

——書き上つたのは、次のやうなものだつた。

此間は失敬。その挨拶は君の方でも或ひはするかもしれないが。

此間僕が書いた紹介狀は、まさか使ひはしまいと思ふ。よしどのやうに必要でも、もう君には僕の書いた紹介狀など使ふ氣はないだらう。君の歸つたあと僕の家でどんな事が起つたか、それ

はもとより君の知る筈のないことだ。だがその起つた事も、あのあとの君の心の中の變化よりはずつと輕いものだつたことは僕も知つてゐる。それくらゐの推察は僕にも出來る。しかし一應は僕の心の中で起つたこと、並びに僕の家で起つたことも、君に知つておいてもらはうかとも思ふ。がそれを知らせる前に僕は先づ最初、こんな話をしたいのだ。話の中のB君は君で、Aは勿論僕、かもしれない。

先づしたい話の大略はかうだ。

BがAの所へかねて頼んでおいた紹介狀を貰ひに行く。

Aは將棋をさしてゐる。定跡の本を見て熱心に稽古をしてゐる。Bが入つて行つてもやめない。Bの話を上の空で聞いてゐる。Bが、「此間頼んでおいた紹介狀を貰ひに來た。」といふと、Aはやはり將棋をさしながら、「ああさうか、出來てゐるから持つて行かうかと思つてゐたのだ、つい序でがないから失敬してゐたのだ、此紙入に入つてゐる筈だ、持つて行つてくれ給へ。」さういつて將棋盤に氣をとられたまま、大きな紙入を懷中から出し、Bに渡す。

B紙入の中のものを膝の上に出す。そのとたん、紹介狀だの手帳だのの間に、挾まるやうにひつかかつてゐた女持の腕時計が落ちる。「や、壞れはしなかつたかしら。」B思はずさういふ。同

時に、ある氣のついた顏をする。それで、「あとは入らない返すよ」と紹介狀だけ取つて、紙入をそつくり、その中に時計も入れてAに返す。

Aは時計の落ちたとたんに、將棋盤から目を離してひよいと見る。險惡と困却の混つた表情、その顏はBも見る。傍にゐたAの細君も見る。Aの細君、ついと立つて部屋を去る。

A、Bの顏を見ぬやうに部屋を去る。便所に行つたらしい。Bも廊下へ出る。

暫くしてAが部屋へ歸つた頃Bも別の廊下から便所へ行く。便所の中で思案する。

その歸り、部屋の前を通りながら、BはAに「さやうなら」を云ふつもりになる。そして中からも「さやうなら」とおとなしく返事をしたら、「失敬した」と詫びて、「いや」とでも返事が聞えたら、默つて歸るつもりになる。

Bはさういふつもりに便所の中でなるが、しかし、さやうならといふとたんに、中から「莫迦」と怒鳴るかもしれない氣がして來る。「莫迦」と云はれたら、「失敬」とは云へなくなる。嚇(くわつ)として謝(あや)まれなくなるかもしれない。で、「さよなら」の代りに、「失敬した」といはうかしらと思ふ。それでも「莫迦」と怒鳴るかしら。さう怒鳴りさうにも思へ、怒鳴らなさうにも思へて、Bはちよつと迷ふ。結局默つて歸らうかとほぼ決心する。

だが部屋の前を通りすがりに、BはAの返事の待てない速度で、「さよなら」と云ひ棄てて歸つてしまふ。

Bは迂闊でAを信じ、A夫妻を全然そんなことのない夫婦と信じてゐたので――まるでそんなことは考へてさへもゐなかつたので、こんな失策をしたのだ。多少考へてでもゐたら、手早く時計は隱し、Aの細君に見せなかつたに違ひない。

――これがざつとした話だ。だがこれを讀んで君は、何を云つてゐるのだと嘯くかもしれない。君が何を云つてるんだと嘯くことは、此際は一先づそれでいいとして、僕はも一つ、今度はお伽噺を君に見せようかと思ふのだ。何故僕が次のやうなお伽噺を書く氣になつたかは、あの日君の歸つたあとで、妻の誕生日が明後日だつたといふ事に偶然氣が付いた結果なのだ。お伽噺と書いたが、勿論これはお伽噺にはなつてゐない。お伽噺のやうに、目出度し目出度しとは行きさうもないからだ。大人が見ると何處か莫迦莫迦しいやうなところが、或ひは幾分お伽噺の資格を備へてゐる點かもしれない。ともかく王様と女王様とを出して來よう。

これがお噺だ。

むかしむかし王様が女王様を悅ばせようとして、時計を買つて歸りました。不意に見せて悅ば

せようと、王様は時計を紙入にひそめて置きました。ところが或る日隣りの國の王様が遊びに來て、紙入をひつくりかへして、時計を落つことしました。側で見てゐた女王様は、女王様の知らない女持の時計が王様の紙入から飛んで出たので、顏色を變へました。

女王様は王様の計畫を知りませんでした。王様が自分を悅ばせる爲にそつと買つたものだとは知りませんでした。それで腹を立てて隣りの國の王様が歸つてから、王様に訊ねました。

「さつきのは何でございましたか。」

「あれはあなたの誕生日のお祝ひです。」

「そんなごまかしには乘りません。お祝物が何故裸で紙入の中に入つてゐるのでせう。」

「それは差し上る前に私の愛情を時計に移しておきたかつたからです。」

「まあ、ずうずうしく御辯解なさいますね。」

「さう誤解されては閉口です。明後日はあなたの御誕生日ぢやありませんか。その日にちやんと函に入れて、美しく飾つて差上げようかと思つてゐたのです。」

「それでは今函を見せて下さい。」

「函ですか。」

「ええ、函です。」
「函はありません。私が自分であなたの手に飾つてあげたかつたからです。その方が近頃の流行です。」
「ほんと？」
「信じて下さい。」
「では信じますわ。」
「ではと云はずに信じて下さい。」
王様はやつとほつとしました。函に入れると云つたり、自分で直接腕に飾つてあげると云つたり、王様はしどろもどろでした。その度にかいた汗を王様はそつと拭くと、王様はやさしく女王様に囁きました。
「どうですか。これからシネマでも觀に行きませうか。」
「まあうれしい。」
女王様はもう薔薇色の頰をしてゐました。
——これも何を莫迦なと、君は吐き出すかも知れない。實際僕にしても、何を莫迦な、だ。女

王様が果してさう信じたかどうか、それは王様にも分らないが、だがこんなことは分つても分らないでもいいのだ。その場がそれで過ぎてさへしまへば、それで十分なのだ。王様と女王様との間の事なのだから、さういふ性の爭ひは、とにかく過ぎてしまへば、それでいいのだ。
こんなお伽噺はこれだけにしておかう。これ以上續けると君が腹を立てて、この手紙を破つてしまひさうだ。でお伽噺の代りにAの獨白といふのを君に聞かせてあげよう。
以下は獨白だ。
困つた事だ。妻の前は何とでもいへる。おそらく妻は自分の辯解を信じてくれるだらう。信じなくつてもかまひはしない。信じた風をしてゐてさへくれればそれでいい。萬一信じた風さへしてくれないでも、それでもかまはない。妻は信じてゐると自分で信じてゐればそれでいいのだ。
妻は何とでも片付く。だからそれはそれでいい。だが困つたことは、それを第三者が見てゐたことだ。第三者の目にとめてならないことを第三者が目にとめたことだ。あの男は何と思つたらう。それが知りたい。それが唯一の心配だ。あの男はあの時確かに顏色を變へた。だがさう思ふのは僕の迷盲だらうか。僕が狼狽しすぎて見そこなつたのだらうか。さうでないやうな氣もし、さうであるやうな氣もする。

實際僕は狼狽した。思ひがけないものが飛び出したので驚いた。どうしてあんなものが入つてゐたのだらう。あの人がそつと入れておいたのだらうか。そんな筈は決してない。何のはずみで入つたのだらう。それが分らない。だから不意を打たれて僕は狼狽したのだ。出來るだけ落ち付いてゐたつもりだが、あの男は僕の表情をよもや見落さなかつただらう。

誰でもないあの男の前であつただけ弱つた。あの男は僕や僕の妻を信じてゐる。それはあの男があの男自身とあの男の妻とを信じてゐることによつて分る。

信じることの篤かつただけに、何故あれが紙入の中に入つてゐたかと考へ出したら、あの男はおそらくその疑ひの中から一生拔け出さないだらう。そんなところのある男だ。偶然何かのはずみだつたと考へてはくれさうにもない。どうしたらその考へをひるがへさせることが出來るだらう。

こんな困つたことはない。

——君にはこの獨白は不愉快かも知れない。おそらくさうだらう。勝手なことを云つて、而も何處となく寬恕を乞ふやうな調子がたまらなくいやかもしれない。君はいちづに此獨白は卑怯だと退けさうに思へる。さうだらうか。さうでないだらうか。

では僕も君のやうに正直にならう。あの日君が部屋の外でさよならをぶつつけて歸つてしまつた以上、僕も君が時計を見た瞬間、驚くべく顏色を變へたことを見たと告白しよう。あの瞬間の君の顏色はいつまでも僕の眼に烙きついてゐる。それ故あの顏色の裏を僕が說明することは十分必要なことに違ひない。

次はBの心持の推察だ。

Bに見覺えのある時計だ。見覺えがある以上の時計だ。どうしてそれがAの紙入に入つてゐたのだらう。この小さな腕時計がいつも何處にあらねばならないか、それはBの知り過ぎてゐるところだ。人もあらうにAの紙入にまぎれこんでゐるといふのは、何といふ意外な——。

Bはこの可愛らしい時計一つで何を考へることでも出來る。それがAの紙入から出たからは、猶更考へなくていい事まで考へられる。

B「これは妻の時計だ。大事にしてゐる時計だ。」

それがAの紙入に入つてゐたのは、どういふ機會に入つたのだらう。腕時計を外す機會——それはいろいろある。腕時計を外してそれがAの紙入にまぎれ入る機會、それはどんな機會だら

腕時計を外すからは、おそらくもつともつと他のものも外したに違ひない。足袋のこはぜも外したらう。帶止のぱちんも？——

それから——？

こんなことを考へてもいいのだらうか。

Bは Aの側に一瞬もゐられない心持になる。Bは息をはずませて歸る。歸つたら妻を散歩に誘つてみようとBは考へる。ちよつと服裝をととのへる必要のある散歩、例へば芝居でも觀に行くか、御飯でも喰べに行くか、さういふものに誘つてみようと考へる。BはBの妻がさういふ外出の時に必ず腕時計をすることを知つてゐる。妻は果して腕時計をするだらうか。腕時計をしてくれればいい。してくれなかつたら、——。

Bは考へる。若し妻が腕時計をしてゐない時、その時の自分の態度はどうであるのか、それが定らなければ、試みることはあまりに怖すぎる。

と云つてぢつと默つてゐられるかどうか。

Bはひよろひよろと歸宅する。そしてBはどう決心していいかその晩中考へる。多分はその翌日も考へる。

——以上の話はどうだらう。相變らず面白くないかも知れない。たかをくくりすぎてゐるから讀む者の、つまり君の腹を立てさせるかもしれない。しかし同時にこの通りの經過をとつたと君は苦笑するかも知れない。

苦笑するかも知れない？——確かに君は苦笑したのだ。苦笑したからこそ僕は次のやうな事を君に述べることが出來るのだ。そして今日この手紙を君に送るのだ。この手紙があの日直ぐ送られずに今日書かれたといふことは、勿論昨日次のやうな話があつたからであり、その話が生れたのは、君の苦笑が豫見出來てゐたからだ。

僕は昨朝ゐる子さんの里を訪問した。さうして、ゐる子さんのお母さんに面會を求めた。ゐる子さんに就ての火急の用事だと云つたら驚いて直ぐ會つて下すつた。

僕としては隨分困つた話だつたが、正直に一切をお母さんにお話した。僕は面罵を覺悟してゐたが、愚痴らしいものもお母さんは洩らさなかつた。で、僕は力を得て云つた。

「ですから事は急です。どうか病人になつて下さい。」

「病人に？　と、申しますと？」

尋常の手段でゐる子さんを呼出さうとしても、君がゐる子さんを出さない事は分り切つてゐ

る。だから僕はお母さんに病人になつて貰つたのだ。そして、お母さんの手紙を、あそこの女中に持つて迎へに行つて貰つたのだ。あの女中は、君も見知つてゐるし、從つて、まさか假病だとか、こんなからくりがあらうとかは思つてもみないだらうから、一番安全な名手段だつたのだ。果してゑる子さんは直ぐ驅けつけて來た。ゑる子さん自身、本當にお母さんが急病だと信じて驅けつけて來た位だから、君は今でもまだ謀計だつたとは考へないだらう？　君のやうに、ぢつと一つの疑ひに凝り固る男を相手には、こんな事も必要だつたのだ。

かうして僕はやつとゑる子さんに會ふことが出來、どうして急に會ふ必要が生じたかを告げることが出來たのだ。ゑる子さんは、時計の話をすると全く色を變へた。時計を君が見たのだと云つたら、――。

まあそんな事は、どんどん端し折つて行つてもいい。

ゑる子さんは、時計を何處かで落したもの、紛失したものと思づてゐたさうだ。君から貰つた時計だけに、隨分氣にはなつたが、そのうちに君に落したと告げるつもりだつたのだ。まさか僕の紙入れに飛び込んでゐやうとは――君は勿論、僕も、當のゑる子さんさへ、氣がついてゐなかつたのだ。恐ろしい偶然かも知れない。さう、偶然だらう、それ以上に意味はつけたくないの

だ。――

ゑる子さんは、お母さんの看病の名で、今日も實家にゐる筈だ。だが明日は何處にゐるか、それは此手紙を今日君が讀むゆゑに、告げるわけには行かないのだ。

話は飛ぶが、ゑる子さんのお母さんは、事穩便にといふお願ひだつた。そしてそれは、恐らく君の肚でもありはしまいか。さうだらうと僕は推諒するのだ。

が、それなら、何故君を焦らだたせるやうな手紙を書いたのか。或は敵にせずに濟むかも知れない君を、無理にも敵にせずにはゐないやうなことをしてしまつたのか。それは勿論ただ僕の君に對する不思議な憎惡からだ。ゑる子さんを許さうとする君の態度、――ひいては僕を不問に附さうとする君の態度、そんなものが、やけに僕の反感を呼んだのだ。誰が許されてやるものか、といふ氣に嫌でも僕はなりたくなつたのだ。同時に、嫌でも君が許し兼ねるやうに仕向けてしまひたくなつたのだ。その心もちが、僕をして、もうゑる子さんを君のところへは歸さない決心にしてしまつた。

さうとなると、君の態度も一變しやしないか。寧ろそれを此際は望むのだ。

さうさう、僕は昨晩こんな夢をみた。もう此上夢の話なんか澤山と云ふかも知れないが、夢の

話だつて何だつて、僕はしたい話しをするのほかはないのだ。

夢の話だ。

……闇の中から松の新芽が匂つて來た。

木立の向うに自動車が待つてゐた。その灯を目あてに玄關を出て來たのだが、僕と彼女は途中で横へそれた。肩に松葉が擦れた。

「なぜこちらへお曲りになつたの？」

「何故てこともないんですけど、ま、もう少し歩きませう。」

松林を出ると、顏に痛い砂埃りが吹きつけて來た。砂に顏をそむけた拍子に、二人はまた松林の中へ引返した。

「おや歸りますか。早く歸つてお母さんを安心させた方がいいでせう。」

「ええ。——あんまり安心もしないでせうけど。」

「さう、およそ安心とは反對なもの——」

僕は突然現れた君の鼻先へ、ゲンコを突き出した。

「これが僕のテーマだ。」と云ひながら突き出したのだ。すると君がカミを僕の鼻先へ突出した。

「これが俺のテーマだ。」と云ひながら突き出したのだ。と、今度は僕がハサミを突出す。君がゲンコを突き出す。僕がカミを突出す、君がハサミを突出す。僕がゲンコ、君がカミ、僕がハサミ君がゲンコ、——。

僕がもどかしがつて、ピストルをいきなり机の上へごとんと抛り出したのだ。そして叫んだ。

「俺のテーマだ。」

同時に君もピストルを抛り出して、怒鳴つた。

「これが俺のテーマだ。」

——そこで目が覺めたのだ。が、必ずしも、そこで目が覺めなくてもよかつたのだ。君がピストルを握り直し、僕も握り直したところで、目がさめてもよかつたし、兩方で引き金に指をかけたところで覺めてもよかつたのだ。

が、本當は、そこで覺めてもよくなかつたのだ。指をかけただけでは、ゲンコがカミになりカミがハサミになると同じで、結局勝負はない譯だ。引き金を引き切つてしまはなければ——それでなければ、目が覺めても仕方のないことだつたのだ。

では引かうか。ではさよなら。

（十五年）

ふるさとびと

一

垣根の向うに兄の顏が見えたので、鐐はおやと思つた。先頃ちよつとしたことで父と不和になり、其ため父から激しい手紙を貰つたばかりだつたので、兄が談判、でもなからうが、調停に、やつて來たのかと彼は思つた。それで、彼は兄に呼びかけた。

「一人？」

「いや――。」

さう答へながら兄は振り向いた。すると其處に、兄から十間ほどおくれて、年とつた母がおぼつかなく歩いてゐた。鐐はほぼ半年ぶりの母を悅んで迎へた。

「やあ、お歸んなさい。」彼は今球根の植ゑかへをしてゐたので、そのままの泥だらけの兩手を振り廻した。「こんなことをしてゐるのでね。――直ぐ行きますよ。」

彼は云ひ棄てて湯殿の方へ手を洗ひに廻つた。彼が手を洗つてゐると、庭先から入つて來た母と兄に、彼の妻が挨拶をしてゐるのが聞えて來た。

母は鐐が結婚して新居を構へると、直ぐ京都の上の兄の方へ行つてしまつた。そして半年ぶりで歸つて來たのだつた。京都の兄の家は北山の山の中に在つた。母は鐐の片も付いたので、一夏の暑さを山の中で消すつもりで、晩春に出掛けて行つたのだつた。それが晩春から、夏が過ぎ、秋が來て、もう冬の小口の寒さが山を襲つて來る時分になつてしまつたのだつた。鐐は山の寒さと退屈をよく知つてゐた。思ふことの半分をさへよくいひ得ない母が、その山の中でどんなに無聊な、あぢきない日を送つてゐるかを、鐐は想見するに足りた。

鐐は母の出發する時停車場で云つた。——「京都に倦きたらいつでも迎へに行きますよ。僕もう一度出掛けてもいい時分だから、かたがた知らせて下されば何時でも迎へに行きますよ。」

鐐は母が秋口には歸り度いといつて來るだらうと豫期してゐた。しかし母は何ともいつて來なかつた。顏を洗ふ水の冷い朝など鐐は山の中の寒さを——筧の水に手を出しかねてゐる母を、思ひやつた。さうして金の都合さへついたら、そろそろ自發的に迎へに行かうかと思つたりした。だがそれも出來ず、いつか愚圖愚圖と日を過してゐた。すると或日京都の兄から、母が歸りたがつてゐると知らせてきた。それを見ると彼は母の一人旅も氣になるし、直ぐ迎へに行かうと志したが、あいにくその當座ひどく彼の手許は不如意だつた。で彼はとりあへず京都へ手紙を出して

改めて二三日後に行くか行けぬかを知らせるから、それまで母が滯在してゐてくれるようにと返事をした。そしてその二三日目が來て、彼が行きかねるからと知らせてやつたのと入れちがひに、京都から母の出發を報じてきた。その報知を鐐が手にした頃は、だから、母は此方の兄の家へ歸り着いてゐるわけだつた。鐐は母に會ひに兄の家へ直ぐにも出掛けようかと思つた。しかし氣まづくなつてゐる父に顏を合せるのがいやで、彼は行かずにしまつた。——

鐐が手を洗つて座敷へ行くと、母は妻を相手にお茶を飲んでゐた。傍らにお土産らしいものが置いてあつた。

「なかなかええ家やな。前のとはよつぽど使ひ勝手がよく出來てゐるやうや。」

鐐は母の不在中に引越したので、此家は母に初めてだつた。

「ええ、ま——」

「庭も廣いし。」

「庭といふでもないが、まあ土いぢりは出來るほどの餘地はあります。」

「さうや。日あたりはいいし。」

鐐は京の北山の山の中を思ひ浮べた。

「あちらはもう寒いでせう。夜明けには氷ぐらゐは張つたかもしれん。」
「そんなこともなかつたけれど、朝晩はずゐぶん冷えた。寒うさへなかつたら、まだゐてもよかつたのやが、何分にもしのぎかねるので――。」
「さうでせう。夏はいい處だが、冬は、いや秋だつてちと冷えすぎるところだからな。多分困つておゐでだらうと思ふので、早く迎へに行かうと思つてゐたのでしたけどね、いろ〳〵手都合もあり、――それに、今んとこ京都はとてもごたごたしてゐる氣がするのでね、うつかり何處へも顔が出せないやうな、――。」
「ほんまに。」
母は感慨深さうな顔をした。母がゐるうちに北山の兄の家では、長女が――それがたつた一人だけの子が、永い患ひのあとで死んでしまつた。彼女は赤ん坊の時の腦膜炎が祟つたのか、十二三から癲癇の發作があるやうになり、それから十年、ずつと兄達を心配させ續けてきてゐた。彼女は二十三になりながら、頭蓋の大きさが子供ほどで、顏付も智慧も子供だつた。ただ子供だけならいいが、多少の白痴を加味してゐた。發病前は相當以上に頭がよく、その點が今でも時折は閃くやうなのが、かへつて憐れさを深めてゐた。

「あれもまあ、よう生きてゐたやうなもんや、手ばつかりかかつて、――死んでみんな幸せかも知れん。」
さう云ひながらも母はたつた一人の孫をなくして、ひどく寂しさうだつた。母は寂しさの中で笑つてみせた。
「まだか、ここは？」
「子供？」
鐐は母の問ひは分りすぎてゐたが、同じやうにほほゑみ返しながらわざと訊ねた。

二

北山の兄の子の癲癇は、鐐の見るところでは、腦膜炎のせゐではなかつた。その腦膜炎そのものさへも、近親結婚の結果に相違なかつた。兄は從兄妹同志の夫婦だつた。從兄妹同志、その爲に不幸な彼等であり、不幸な子であり、陰慘な家庭だつた。兄は子供の健全なうちは、町の中で相當な生活をしてゐた。子供が不治の病氣だと分ると、兄は一切を棄てて子供の爲に――おそらく兄は無常觀に取りまかれた寂しい心で、北山へ逃げこんでしまつた。それから十年、半ば道樂

の樂燒をこねて、兄は細ぼそと北山で生きてきた。盛んな頃は遊びすぎた兄だけに、それも却つて似つかはしくも見え、子供の不幸を除いては、さのみ鐐も同情しないですむやうな氣がしてゐた。

兄の長女は癲癇と共にひどい脚氣を持つてゐた。或年の春、鐐が滯在してゐる時、臺所で嫂がけたたましい叫びをあげた。鐐は驚いて飛んで行つた。見ると脚氣の子に癲癇の發作が起り、彼女は煮えたつた鍋をひつくり返して、焜爐の中へ手を突つこんでゐた。鐐は夢中で彼女を座敷へ運んだ。ちやうど焚きたての御飯を釜から移しかけてゐた嫂は、しやもじを持つたまま座敷へ鐐と一緒に駈け込んだ。

「嫂さんお醫者は？」

「そんなものよろしい。」

初めて發作を見た鐐はすぐ醫者を考へたが、嫂は慣れてゐた。發作の方はそのままに棄てておいて、火傷の手當をした。焜爐に突つこんだ手は勿論、顏も鍋のものをかぶつて水膨れだつた。それでその日鐐は食事が出來なかつた。

發作がをさまつたあと、嫂は娘を手ひどく罵つた。度度のことで、嫂は彼女を罵ることの外、

何事も出來ないかのやうだつた。用もない臺所へ何故うろうろ出て來たかと、嫂は娘を罵つた。この一兩日發作の徵候が見えるので、嫂は娘にぢつとしてゐるように云ひ聞かせてゐたのだつた。

「なんぼ云ひ聞かせても分らんのやなア。尤も阿呆やから仕方がないけど。阿呆！」

「さう叱つてもあかん。」

兄はさうただ一言いつただけだつた。嫂は罵り續けた。鐐だけが此不幸な病人を、私かに慰めてやつたのだつた。

「お母さんのゐたうちに、やつぱり發作が起りましたか。」

「それどころか、心臟がひどう惡うて、ずうと寢たきりやつた。蒼うぎんばつてな。——」

「大變でしたね。」

「——あては、何もせなんだけど。」

「それで、死んだ時はどんなでした？」

「もう、どんなつて、ただもうずうと死んでしまつた。」

鐐は、ずうと死んでしまつた不幸な娘の爲に、ただおし默つてしまつた。暫らくしてから鐐は

いつた。

「今年はさんざんでしたね、何處も彼處も。」

「ほんまに。あの娘は仕方がないけど、和さんはほんまに氣の毒なことをした。あんなに大丈夫さうやつたし、——世の中はええことばつかりはないもんとみえる。」

和緒は鐐の仲よしの從姉で家附の娘の、ぬつと育つた我儘者だつた。三十五年の生涯は好きなことをして暮した生涯だつた。腸の病氣だと分ると、百方出來るだけの手段を講じたのだが、既に手遲れだつた。どんな醫療も無効で、手をつかねて死期を待つ運命だつた。さうして、此冬といふのが、秋になるかならない時ぽつかりと死んでしまつた。

「出來るだけのことをしたのやから、まア定命やが、あんなに達者さうでゐて、それに今日の不自由もなし、いつまででも生きてゐていい人やが、——」

「苦勞といへば、まあ子供のひ弱いことぐらゐでしたらう。しかし子供ももう大きいのだから、下の子ももう女學校でしたね。」

「ふん、さうや。子供はもうちつとも手はかからへん。」

「それで謹造さんはどうするんです。」

「それがな、今いろいろの話が起つてゐるのや。本家の三左衞門はんは芳子さんをあとに直すと、血も薄うならんし、諸事めんだうがなうて都合がええと云うてやはるんやがね。」

「芳子を？　成程ね。」

芳子は和緒の一番上の姉の娘だつた。つまり芳子は和緒の姪に當るのだが、年輩がさう違はないので二人は姉妹のやうに仲のいい友達みたいだつた。隣同志に住んでゐて、病中もずつと世話もし續け、主婦に代つて萬事を采配してゐたわけだつた。芳子は一度緣づいたのだが、緣づくとすぐ夫が死んだので、その時既に胎にゐた子供を今は育てて、ずつと若後家を通してゐるのだつた。和緒の子供も芳子を姉さんと呼んで馴れ親しんでゐるのだから、芳子が和緒のあとに直れば、それは或ひは都合のいいことかもしれなかつた。

「それでその話はどうなんです。」

「謹造さんは異存はないのやけど、芳子が進まんのでな。何しろ子供もあるし云うて、——芳子もそらそやろ。後妻になつて氣苦勞せんでもええ身分やからな。子供についた財産もあるし、それに此頃は妙なことからお茶の先生もしてゐるしな。」

「先生になりましたか。」

「ふん、ほんとの先生が死なはつてな。」
「よくまあ誰も彼も死にますね。」
「ふん、急に死なはつてな。それで芳子があれでも一番弟子やし、それでそつくり外のお弟子の世話をしてゐるのや。若い後家さんで、外にすることもなし、まアお茶の先生なんてええとこやろ。遊んでゐるより氣がまぎれてよつぽどええやろ。」
「そりやさうですね。」
「本家では、謹造はんが何處か餘所からあと貰ふとあんまり他人になり過ぎる云うて、氣を揉んでゐやはるんや。」
「でも芳子が不承知なら仕方がないぢやありませんか。」
「そらそや。もうあの家もな、今は謹造はんのお母はんも來てやはるのやし、結局は他人になるのや。でもな、家の事は今ではずつと芳子が世話してゐるのや。此頃は、自分の子も連れて隣りへ泊りきりで、何から何まで世話してるらしい。まアそのうちに、そやから、どうかなるやろ。和さんも死ぬ時にはやつぱり後の事がいろいろ氣になつたと見えて、今芳子の住んでる家な、あの家ももう芳子の家に上げる云うて、遺言して死んだんや。」

芳子の家も失敗つづきで逼塞し、今では和緒の持家の一つに住んでゐるわけだつた。
「ずつと家賃をとつてたのやからな、細かいことや。さすがにそれが氣になつたのやらう、家は上げるといふ遺言をしたのや。」
「そらいいことですね。」
「ふん、それくらゐのことしてもいいのやさうな。あの邊ずつと今度市區改正でな、それで謹造はんの持ち地面がずつと角に出て、何でも大變値が上るのやさうな。だんだん身代は增えるけれど——ええことばかりさうさうはないと見える。」
芳子は一度は鐐の妻に擬せられた女だつた。しかし鐐は北山の兄の前例を見て居り、血の近いのが氣になつてそのままにしてしまつたわけだつた。さういふことが一度でもあると何かにつけその女のことが頭に浮ぶものだが、それだけに鐐は芳子がもしかすると、と云ふよりいづれはおそらく謹造の後妻に直るだらうと、考へると少しは變な氣がした。人それぞれの一生が勝手に縺れて行くのが、——。
「だから、長生きしたいものですね。」
鐐は母に笑ひかけた。

「わてみたいに長生きしててもつまらん。」
母はいつものロ癖を出した。母はよく死んだ方がましみたいなことをいつた。六十幾年生きて來て、母も生き疲れてゐるやうな口振りだつた。
「何にも面白いこともないし、起きて寢て、一向につまらんことや。死んでも生きてても同じことや。」
母はいかにもつまらなささうに屢さう云つた。そんな時鐐は何といつていいのか分らなかつた。ただ苦笑してごまかすの外はなかつた。仕方なしに彼は、芝居にでも出掛けてはどうです、と母に云つてみることもあつた。
「芝居かて、いつでも同じや。一つ觀たらあといつ觀ても變つたことはない。それに目も遠いでな、役者の顏もぼうと見えるだけやし——目も鼻も見えん顏を見たてしやうがない。」
のつぺらぼうの役者では、なるほど仕方がないだらうと、鐐も思つた。それで母が肱枕かなんかで日當りのいい緣側にごろりとしてゐたりするのを、默つて見てゐるだけだつた。——
母を案内してきた兄が此時立ち上つた。
「ちよつと一軒廻るから、これで歸るよ。お母さんを賴んだ。ぢやごゆつくり。」

「さう、ぢやさよなら、お母さんは僕が送つて行く。どうせ今夜は此處にお泊りだらうが。」
「わてか、わては歸るえ。」
「まあ暫くおゐで下さいましよ。」
妻がさうすすめた。

三

芳子の母親が一番上で、その次が北山の嫂で、その下が和緒で、此三人の姉妹はだから皆鐐の從姉だつた。三人のうち、芳子の母親が一番美しかつた。もう五十に近い今でも確かに美婦人だつた。年頃には評判の美しさで、山ほどの緣談があつた。その中で擇りに擇つて、一ばん爲によささうな先へ嫁入らせたのだつたが、それほどの先が破産して、暫く不幸な生活を續けたあげく、今ではその夫とも別居してゐる有樣だつた。その夫といふのは醬油の釀造を業としてゐたのだが、放蕩とそれに續く失敗とで、手のつけられない男になつてしまつたのだつた。
その男は母親を見初めると、人を以つて申込み、それがはかばかしくないと自分で幾度も嫁に欲しいといつて來たのだつた。

「どんなにでも大事にしますし、」と彼はいつた。「こんなにせいと云ふのでございましたら、こんなにでもいたします。」といふが早いか彼は跳で庭へ飛出し、いきなり土の上へ坐りこんで兩手をつき、幾度も幾度も頭を土につけた。彼は泥のついた額をあげて、懇願に懇願を重ねた。——

そんな話を聞くと反感ばかりか、無限の侮蔑をさへ鐐は感じるのだつたが、娘の親達はこれほどに云ふなら、といふ氣になつてしまつたらしかつた。こんなにまで云ふからは、よもや間違ひはあるまいと考へた親達は、たうとう娘をその男にやつてしまつた。花嫁は幸福だつた。親達は喜んでゐた。親達は熱したものはさめないかのやうに盲信してゐた。だが幾年かたち、そして娘はぼちぼち不幸を親達に訴へるやうになつた。放蕩から失敗に移り、失敗しきつてしまふと男の無檢束は殊にひどくなるばかりだつた。彼は花街に女を圍ひ、それにお茶屋を營ませ、ずつと入りびたるやうになつた。以來絶えずごたごたがあり、たうとう五十に近い夫婦が別れてしまつたのだつた。——

だが何といふ人間の不思議さ、といふより自分勝手さが、そんな苦い經驗があるにも拘らず、芳子の母親は芳子をちやうどその男のやうな態度で貰ひに來た先へ片付かせてしまつた。そんなにまで望まれるなら、よもや間違ひはないだらう、といふ氣になつたのは、まるで自分達の過去

を忘れきつてゐるのだつた。自分達はそれが狂つたが、娘の場合は、今度こそは狂はないだらう、さう勝手よく考へたのだつた。だから芳子も同一轍を——或ひは踏んだかもしれなかつた。だが、何よりも前に、たつた半年で死別した爲に、芳子は母親のやうな運命にはならなかつた。

幸福でない點は同じであつたが、北山の嫂は——何故こんなに破産するのだらう、彼女の夫も彼女に暫くの幸福な月日を與へただけで失敗者の群に入り、引續いて子供の病氣から北山へ閉ぢ籠つてしまふやうになつた。北山の兄は若い時は遊んだが、それ以來はずつと純良な、だが世間の目で見ると無能に近い人物だつたから、放蕩で妻を苦しめはしなかつたが、ただそれだけの話で、決して幸福の中に嫂を置きはしなかつた。近親結婚の薄暗い家庭で嫂はだんだん老いこんで行つた。

凡ての點で和緒が一番幸福だつた。彼女達の親は、まだ或ひは男の子が生れるかもしれないと考へて、上の娘から順順に片付けて行つたが、もう男の子はさておきどんな子供も生れないと分ると、和緒を相續人と定め、それに謹造を養子として娶合せた。彼等の中に一男一女が生れ、贏弱ではあつたが、欠けもせず育ち、懷手してゐても困らない生活がずつと安穩に續いてゐた。子供の爲、といふ口實は和緒の避暑と避寒、さういふ名で遊び歩くのに、却つて好都合であるかの

やうであつた。結婚當座續けざまに二人の子を産むと、和緒はその後だんだん肥えはじめ、三十を越す頃にはいかにも小さな資産家の家附娘らしくどつしりと構へてゐた。その頃には、芳子の家の失敗後で、芳子達がその隣家に移つて來たので、和緒は芳子をちやうどいい相棒にして、着飾つて出歩いてばかりゐる樣子だつた。和緒の頭にはおそらく姉達の不幸、そんなものは少しの影も浮んでゐないやうであつた。おそらく姉達の不幸さへも意識してはゐなかつたであらうと思はれた。さうして三十五で腸が惡くなり、死んでしまつた。

いろいろの家庭が興り、いろいろの家庭が潰れて行くのを、鐐はぢつと眺めてゐた。母が歸つて來てそれぞれの近況を詳かにし、謹造や芳子が――まアどうなつてもいいだらう。鐐はこれにもぢつと目を注いでゐようとするだけであつた。

四

鐐は母に云ひかけた。

「北山も何處も、當分京都はいやだなア、これぢや貧乏してもまだしも此方の方がいいかもしれませんね。」

「ほんまに。――川村へも二晩ばかり泊つたけど――。」

「ああ、彼處も大變でせうな。喜代さんは寢たきりですか。」

「喜イも寢たきりやし、それに末の子は相變らずコツンコツンやつてゐるし。」

「やつてゐますか、困つたものですね。」

「もうあの家へ行くのもかなわん。」

川村は母の里だつた。それを母がさう云ふくらゐだから餘程ひどいのに違ひなかつた。川村の當主の其一は達者な、家中の健康を一人で引受けてゐるやうな人だが、あとは常に病人が多くて、しよつちゆうじめじめした家だつた。母の姉、つまり其一の母親で鐐の伯母さんにあたる人は、五年ほど前になくなつたが、その前はずつと、鐐が記憶してからずつと、寢たきりの人だつた。鐐の母は、若い時はさぞ肥つてゐただらうと思はすところがあるが、伯母さんは痩ぎすの蒼白い美人だつた。これといふ病氣もないやうに鐐には見えたが、伯母さんはいつも寢たきりだつた。その時分は其一が東京へ出て、音樂學校へ通つてゐたので、廣い屋敷には伯母さんが一人、所在なささうに寢てゐた。病氣だから寢てゐたのか、寢てゐるうちに病氣になつたのか、鐐には今でもその邊がはつきりしないくらゐだつた。其一が學業の中途で歸つて來、母屋が賣られて門の側

の小さな二階家に移つた頃からは、伯母さんはもうほんとに病人だつた。何時訪ねても奥の六疊に伯母さんは寢てゐた。伯母さんは寢てゐるし――そして、其一が二階でヴァイオリンを鳴らしてゐた。伯母さんは亡くなる前暫くは、ずつと垂れ流しだといふことであつた。其爲か伯母さんがなくなつたあとも、當座は川村の家は臭いやうな氣がしてならなかつた。伯母さんがなくなつてから、其一は妻を娶つた。喜代さんは伯母の妹、鐐の母の姉の遺子だつた。だから其一と喜代さんは、これも北山のやうに從兄妹同志だつた。喜代さんは其一の所へは行きたがらなかつた。鐐の聞いてゐるところでは、喜代さんは從兄妹同志であるのを嫌がつてゐるのだといふことであつた。が北山の兄などは、なに外にも譯があるのでね、と云つてゐた。

喜代さんは行きたがらなかつたのだが、しかし彼女はどうにも外に身の振りやうのない位置にゐたので、結局其一と夫婦になつた。喜代さんには兄が二人あつた。上の兄は鐐の記憶にないが、次の兄は美術學校へ通つて彫刻を學んでゐた。木彫をやつてゐるといふことで、時どき白木の盆に雀の刻つたのなどが鐐の家にも轉つてゐた。しかしその人は、その兄もさうであつたやうに、肺を病んで卒業間際に死んでしまつた。それと前後して彼等の母親も同じ病氣で死んでしまつた。御所柿の樹のあるちよつとした屋敷だつたが、其處にたつた一人喜代さんは取り殘されてし

まつた。そのままでゐたなら、おそらく彼女も同じ運命におちたかも分らなかつた。さうして一家死に絶えてしまつたのだらう。

彼女は其一と結婚してから、蒼く痩せて行つた。まるですぐ死にさうなほど憔れていつた。だが死ぬ代りに彼女は次次に子供を産んだ。分娩のあと彼女は寢てゐる日が多かつた。寢てゐて子供を産んでゐるやうだつた。それほど彼女の健康な日は稀であつた。四人目の子供を産んだあとで、彼女はずつと寢つくやうになつた。伯母さんが垂れ流した部屋に彼女も藥臭い身を横へてゐた。

其一は何時の間にかヴアイオリンを鳴らさなくなつた。その代りまづ無益としか思はれないやうな著述に凝り始めた。彼は古本屋を熱心に漁り始めた。集めた本を彼は立派な裝幀に製本し直させた。

「こないなつたでな。製本し直さうと思ふのや。少し熱心に繙讀すると、すぐかうなるでな。」

「へへ、さやうで。」

製本屋は狡さうに笑つた。新本を讀み古したか、古本の手入れか、そんなことは素人にも一目で分ることだつた。製本屋は其一にお世辭笑ひを送りながら、高い製本料を貪つた。――

其一の著述といふのは、屋上屋を架するやうな仕事ばかりだつた。鋏と糊と――鐐の見るところでは、筆耕類似を出ぬ性質のものだつた。だが其一は眞面目で、創意ある大著述に從事してゐるかの樣子だつた。彼は著述に倦きるとよく時計をいぢくつてゐた。彼はどういふ譯でだか、時計の修繕に感心な腕を持つてゐた。彼の音樂にも、著述にも、信用はおきかねたが、時計の修繕だけは本物のやうだつた。彼は近所の時計屋と別懇になり、暇な時には時計屋から直し物を借りて來て、つまり無料の篤志職工だつた。

川村其一は數卷の著述を完成した。しかし何れも決して出版されなかつた。從つて一文の收入も稼がないわけだつた。彼の居喰ひの生活はおひおひ窮迫の度を深めて行つた。賣り盡すものを賣り盡すと、四十近い彼は仕方なしに市役所へ務めることになつた。彼は市役所では市志の編纂に從事することになつた。またそれ以外には使ひみちのおそらくない彼でもあつた。彼が務めで得て來るものは一家を支へるには足りない僅小の額に過ぎなかつた。それで彼は、同僚の時計の修繕を時どきはやつた。妙な藝が身を助けて、おそらく彼も苦笑を禁じ得なかつたに違ひない。

長女が女學校へ入る頃になつて、彼等の貧乏は殊にひどくなつた。長女はそれでも一年女學校へ通ふことが出來、そのあとは、喜代さんの寢ついた一家の爲に、幼い弟妹の爲に、朝から晩ま

で立ち働かなければならなかつた。三人の弟妹はその幼さの爲に非常な世話がやけた。六つになる男の子が表でちよつと目を離してゐる間に自動車で轢き殺された不幸なども、寧ろ彼女並びに一家の爲に幸福だといふやうな見方をさへしなければならない狀態だつた。その子とその次の子は普通の子供だつたが、一番末の子は從兄妹同志の惡さを明かに示してゐた。その子は並外れた大きな頭を持つてゐて、そしてその頭をいつも壁にコツンコツンと打ちつけてゐた。泣きもしなければ笑ひもしなかつた。默つてむつかしい顏をして、その子はコツンコツンと壁に頭を打ちつけてゐた。鐐は其一と二階に對座してゐて初めて此音を聞いた時、此異樣な地響は何だ、と訊いた。

「頭ぶつつけてんのや。妙な子やが、泣きもしよらんから放つてある。」

其一は子供が玩具とでも遊んでゐるかのやうにこともなげにさう答へて、却つて鐐を驚かした。

「醫者は何ていふの？　妙な病氣だね。」

「醫者か、醫者もしやうがないらしい。それでそのまま放つてあるがね。しやうがあつても放つくよりしやうがないけどな。ふふ。」

其一の笑ひは寧ろ凄かつた。

「困つたものだね。」

鐐もさういふだけだつた。

そんな中でも其一は著述の道樂を棄ててゐなかつた。「紀記新釋」「催馬樂解」「懷論語」「老子」「京都市志別考」「二十一代集精英」――。

「此精英はな、單なる精英でなうて、和歌作法を兼ねてゐるのや。單なる精英では、それは讀者に相應の下地がないと、あつたら猫に小判や。また作法はとかく無用の長物、死物になりがちや。名歌を讀んで行くうちにおのづと眞隨を會得して、自分でも作れるやうになるのが、わしの精英の目的や。何しろそもそも歌枕から、何から何まで考證して行くのやから、ひどいめんだうや。まだ半分しか出けんがな。」

さういつて彼は口許をきゆつと締め、古風に煙管へ水府を詰めた。

「貧乏しても、偉いね。」

「これか、箱は水府やがな、中はさつきや。てんともう此頃は煙草も吸へんて。」

「まアあんたも大變だからな。」

鐐はあたり障りのないやうにさう云つたが、同時に愕然としてある種の責任を感じた。

川村は元來こんなに貧乏である筈はなかつた。數軒の貸家と手廣い屋敷と、それを手放すべく無理强ひに强ひたのは、鐐の父の仕業だつた。鐐の父が家督を繼いだ當時、頭の押へ手のゐない若さにまかせて、父祖の業の外に、八方に手を擴げ、そして悉くが失敗に終つて、その救拔の爲自家の家屋土地全部を抵當に入れてそれが流れさうになつた事があつた。その時父は母の里の川村に目を付けて、何といひ繕つたのか、父のことだからおそらく、いまに百倍位にして返すとか何とか云つたのだらう、川村の持家全部を賣拂はせてしまつた。父の夢想に近い、やりすぎた仕事は、そんなところで決して終りを告げず、彼は持つてゐるものを全部なくし、それでもどうにもならず、たうとう家資分散の宣告を受けてしまつたのであつた。だから無論川村の家も、父の言葉に從へば、「それなりけり」であつた。――

「川村のコツンコツンも困つたものですね。」鐐は母にいつた。「あの子もそのうちに死にでもすれば、却つてお互ひに助かるやうなものかもしれないな。あのままで大きくなつたんぢや――」

「ほんまに。男の子の阿呆なんか、それこそどうにもしやうがないでな。」

「あけみでしたかね、上の女の子は。あの子を學校へやるくらゐのことぐらゐ、せめてうちで引

受けなければならない筋だけれど、それもなかなかむつかしい話でね。」
「あの子がゐなけりや、誰も世話の仕手がないからな。學校へやるとすると、看病人を雇うたり——雇人といふものは一人ではさう何もかもせんものやよつてな、すると又別に子供の世話も誰かに頼まにやならんし、何やかやとなると、こら大變や。」
「そらさうですね。容易なことぢやありませんね。」
改めて彼は母と顔を見合せた。

五

鐐は久しぶりに故郷の人達の話を聞いて、それからそれといろいろのことを考へ續けた。何處の家も暗くて、明るい家は一軒もなかつた。おそらく一族といふものは、一軒の火が消えると次の家も暗くなるものらしい。さうして次次に潰れて、跡かたもなくなつてしまふものらしい。和緒の家が他人らしくなつて行くのは、寧ろその家の榮えるしるしで、悅ばねばならぬことなのであらう。——
「——ぼちぼち歸りますわ。」

母はさういつた。
「歸る？　まだいいぢやありませんか。今日は勿論お泊りだと思つてゐました。暫く泊つて行つてもいいんぢやありませんか。」
「ふん、そいでもな、歸りますわ。」
「まアいいでせう。お茶でも入れかへませう。」
「もうお茶も飲んだし、もうよろしい。」
「まアでも——」
母は何方かといふと氣の弱い、我を張ることの出來ぬ質だが、かういふ、遠慮が基礎になつてゐるやうな事柄では、かなり強く、殊に近年は主張するやうに思はれた。鐐は結婚まで永い間母にめんだうを見てもらつて一緒に暮してきてゐたのだが、結婚生活の開始と同時に母に何處かへ行つて貰ふやうに頼んだ。母は鐐の幸福の爲には何事でも聞く人であつた。母は唯唯として京都へ去つた。
結婚後日が經つと、鐐は時どきは母のゐる方がよくはないかと思ふやうな日もあつた。近頃では、一緒にゐても或ひはその方が勝手がいいかも知れないと思つてゐたりした。それで今もほん

とにゐて欲しくて、賴むやうにいふのだが、母は何としても歸るといつて承知しなかつた。云ひ出すとまるで子供のやうに聞きわけがなかつた。

「來た道も分つてゐるし、歸りますわ。」

「分つてゐるといつたつて、さうは簡單に分るわけがありませんよ。第一何處でどう電車に乘りかへるのだか、ほんとは分つちやゐないでせう。」

分つてゐるとしても夕方目がけて混雜の中へ母を一人歸すことは到底出來るわけのものでなかつた。母がたつても歸るといふのなら、彼は送つて行く氣で、だが出來るだけ泊るようにと勸めた。

「どうあつてもお歸りになるなら、送つて行きますがね、だけどね實はちよつとお父さんに會ひたくないのでね。」

「こなひだ何かあつたの。」

母の口振りでは父は何も云つてはゐないやうだつた。父は鐐に侮辱されたと考へてゐるに違ひないので、さういふ恥はやつぱり吹聽しかねるもののやうに思はれた。鐐は別に父が嫌ひなわけではなかつた。しかし父の我儘氣儘には時どき閉口した。父は子供自慢からどうかすると父の友

達を勝手に引つぱつて邪魔に來ることがあつた。鐐は父の友達といふだけですこしも知るところのないそれらの人達に會ふのは、もとより甚しい迷惑とするところだつた。彼は、父の世話にはずつとなつた憶えがないと少年の頃から常常思つてゐるので、父が見え透いた自慢で友達などを引つぱつて來るのをにがにがしくさへ見てゐた。だから彼はそんな場合の父には決して愛想のい い顏は見せなかつた。父として取扱ふことさへともすると手びかへるくらゐだつた。こなひだも父が見知らぬ人を連れて來たので、ちやうど來客のあつたのを幸ひ、彼は父を妻に任せきりで、歸るまで顏を見せずにしまつた。それが父には限りない侮辱と映つたらしかつた。友達の手前引つこみのつかない苦しさを味つたかのやうだつた。翌日父は端書の裏へ墨黑黑と、べらぼうめと書いて寄越した。そしてその側へ、老生未だ玄關拂ひを喫したること曾てなし、人非人め、べらぼうめ、と書いてあつた。勿論鐐は返事も出さなかつた。

母を送つて行けば多分は父に出會ふだらう。それは鐐の欲しないところだつた。彼は母に云つた。

「ともかく暫くゐて下すつちやどうです。」

「ゐたかてしやうがない。歸りますわ。」

歸ることが何よりも鐐の爲にいいことかのやうな口振りだつた。鐐は仕方なく母を送つて行くことにした。

氣が付くといつの間にか妻がゐなくなつてゐた。彼は手を叩いて女中を呼んだ。

「奥さんはどうしたい？」

「あのう、お買物に行らつしやいました。」

「ふん。何の邊へ行つたのだらう。」

「御隱居樣の召し上りものを、何でも買ひに行らつしやるといふことで。」

「さうか、よろしい。」

鐐はこれを云ひたてて、もう一度母を止めようとした。だが母は頑固にきかなかつた。

「御馳走はまたしてもらひます。今日は歸りますわ。」

まるで何か母の氣に入らない不都合でも此方でしでかしたのぢやないかと氣の廻るほど頑固だつた。

鐐は母を送つて出かけた。

六

鐐が母を送つて歸つて來ると、妻が不服さうな顏で迎へた。

「どうしてお母さんお歸りになつたの？　せつかく何かおいしさうなもの、と思つて買ひに出かけたのに。せめて歸つてくるまでゐて下さるようにお止めして下さればいいのに。」

「とめたんだよ。とめたんだけど、まるで子供のやうに、歸ると云つてきかないんだ。仕方がないから根負けして送つて行つた。」

「さう、ぢや仕方がないけど――で、お父樣にお會ひになつて？」

妻は何か珍しいことを訊くやうに眼を生きいきさせた。

「會ふもんか。家まで行きやしないんだよ。三丁も手前でお母さんに別れて來たんだ。――何だかくたぶれちやつた。」

彼は書齋へそのまま入つた。それから、

「おい」と妻を呼んだ。「おい、さつきのお土産を持つておいで。」

お土産はお茶だつた。お茶は二罐あつて、一つは北山の香奠返しだつた。その上に紙切が貼つ

てあり、「八月二十二日、富山妙麗信女五七日志」と北山の兄の筆蹟で書いてあつた。鐐はそれを丁寧に剝し取ると、改めて形ばかりながら手を合せ、默つて頭を下げた。

「富山妙麗信女」

彼は口の中で靜かにつぶやいた。さうしてその紙切の端に机の上の糊をつけ、佛壇もない新世帶故、書棚の中へ、人の見えない所へ貼りつけた。だが其處にはもう一枚同じやうな紙切が、それは和緒のが、貼つてあつた。「淸心院照譽淨山智光禪定尼」字數もずつと金持らしく澤山あつた。それと並べて貼つた「富山妙麗信女」に鐐はもう一度默つて頭を下げた。そのとたん、彼は理不盡に悲しくなり、ぽたぽたと涙を落した。

（十四年）

逆目立つ

一

その宿で大原禮吉が目を覺ました時分には、前夜の遊び友達が、もう二人まで、やつて來た。二人を見ながら大原は寢不足の顏で云つた。

「ふたりか、ぢや僕を合せて三人だね。三人ぢや仕樣がない。」

「うん三人ぢやね。」

さう合槌を打つたのに、別の一人が附加へた。

「だけど、すぐ誰か來るよ。心配はない。」

「心配はない、か。心配がなさ過ぎて、少し困るくらゐだね。ははは。」

彼等は前夜から、四人でやる遊戯に夢中だつた。その爲に、大原は終列車を失つて、東京へ歸へれず、仕方なしに、實は半分望んだかたちで、この鎌倉の宿に泊つたのだつた。前夜は十二人も集つて、三組に別れた賑かさで、夜中過ぎまで遊び耽つてゐたのだつた。だから、今來たのは二人だつたが、あとから追つかけ、何人でも來さうなのは、明かだつた。

「だけど、來るに極つてゐても、それまでぼんやりしてゐるのは、もつたいないね。誰か呼ばうぜ。」

「さうだ、時間を尊重しよう。」

他の事だと、恐らく尊重しさうもない時間だつたが、こんな事にかけては、少しの浪費も——といふよりも遊びたさが一杯で待ち遠うで仕方がないのだつた。

呼ぶとなると、電話の利くところが一番いい譯で、おまけに近所だから、水野へすぐ電話をかけさせた。水野は呼び出しを待ち兼ねてゐた樣子で、一とたまりもなく遣つて來た。

「ゆうべの今日、ぢやない、今朝だからね。さう朝つぱらから飛び出しも出來ず、實はむづむづしてゐたのさ。」

水野はさう云ひながら部屋に入つて來た。

「ぢや、渡りに舟だね、では早速——。」

がらがら彼等は遊び道具を取り出した。そしてほんの少しばかり進行したときだつた。女中が急ぎ足でやつて來た。

「大原さんに、電報で御座います。」

「——電報と、電報んと、——ぽんと行くか、」

「電報、こちらへ置いて參ります。」

大原は電報を手にとつて、どうせ大した用事でもないだらうと開けてみると、意外だつた。

「——こいつ困つた。歸らなきや。——」

電報は彼の妻からだつた。電文は、妻の母が危篤だといふのだつた。直ぐ歸れとも何とも差圖めいたこと乃至希望は一字も書いてなく、唯事實を知らせてあるに過ぎなかつた。それだけに、直ぐ彼も歸らなければならない譯だつた。

仲間の一人が云つた。

「直ぐ歸りたまへ、他の事ぢやないのだから。——それにしても、此處だとよく分つたね。」

「それや、當り前さ、どうせ鎌倉へ行つて、歸らなければや、此處に泊つてゐると踏むさ。それくらゐの事。——だけど、やりかけた計りで、直ぐ拔けるんぢや惡いね。それに、水野君までわざわざ呼んで。」

「そんな事はいいさ。早く歸つたがいいよ。」

時間を見ると、汽車は丁度出たばかりだつたので、その間に彼は東京へ至急電話を掛けさせた。

妻を呼び出して聞いてみると、病人はちよつと持ち直したらしいといふ事だつたので、大原はやや落着くことが出來た。それで發車時間まで、何事もない風で仲間に加つてゐた。

「ここで拔けるのは惡いね。第一、殘念だ。折角ひねつてやらうと思つてゐたのに。」

「そんな事云つてないで、捻り返されないうちに歸ることだよ。」

「そこもある。」

時間が來て大原が立たうとする間際に、別の仲間が一人加つたので、競技は彼が拔けても差支なく進行することになつた。

東京へ歸り着くと、大原は直ぐタクシを飛ばして、谷中の奥に病人を見舞つた。病人は思つたほど弱つてゐなかつた。そして彼を認め、床の上へ起きあがらうとさへした。彼と傍らにゐた者とは驚いてとめた。彼は場慣れないので何と云つていいのか分らず、適當な見舞の言葉も出ないので、ただ幾度となく頭を下げた。そのたびに彼の長く伸びた髪が、額の前にばらばらした。

大原は看病疲れと興奮とで色のなくなつてゐる妻を別室に呼んで云つた。

「僕がゐても役に立ちさうもないから、歸るよ。明日また來よう。」

「ぢや明日いらつしやる時ね、何か御見舞持つて來て頂戴。こんなですもの――。」

妻はさう云ひながら部屋の隅におびただしく積まれた菓子折だの果物籠だのを指した。そして附け足した。

「何も持つて來ないの、うちだけよ。」

「よし分つた。」

うちだけよと妻が云つたのが大原には少しをかしかつた。妻が實家へ歸つてゐて、さうしてそんな義理めいたものを感じてゐるのが本當は彼にのみこめなかつた。大原は彼自身とその兩親との、むきだしな仲などを考へて、どうしてよその家はかう規帳面なのだらうと思つた。

「――持つて來るつもりでは、今日もゐたのだがね。何がいいのか分らなかつたし。――あすまでには考へておくよ。」

それから彼はも一度病室へ行き病人にお辭儀した。病人は彼が來たのを嬉んだと丁寧に答へた。それで彼の氣持ちが輕くなり、來る途中の重重しさをすつかり忘れることが出來た。

翌日大原は何か持つて病人を見舞ひたいと家を出た。だが、病人を直接慰めさうもない菓子折や果物籠を下げる氣にはどうしてもなれなかつた。さういふ形式だけの事は何としても莫迦らしく、自分だけはもう少し自分の氣の濟むものを持つて行きたかつた。だが何にしても、彼は餘

り金を持つてゐなかつた。三四日前なら、それでも多少はあつたのだが鎌倉で使つたりしたので、丁度ないどん底だつた。で、考へた揚句が、植木鉢でもといふ平凡な思案だつた。

花屋で彼の氣に入つた一鉢があつた。大きな花のやうな葉が一枚、綺麗な色彩を見せてゐた。彼は高さうだなと内心恐れながら値を聞くと、それは一圓二十錢だつた。一圓二十錢は安すぎた。それだけの見舞ではと、流石に金に困つてゐた彼にも、何だか安さが氣を咎めた。しかし、彼は自分の氣に入つたものだから、その一枚の葉をぶらさげて病人を見舞つた。

妻も葉つぱを見て綺麗だと云つた。

それでも大原は公然見舞だと出しかねて、彼が歸つたあとで、默つてそつと病人の枕もとに置いてくれるように、妻に頼んだ。

その後四五日してまた彼の見舞つた時だつた。ずつと寢泊りの看病してゐる妻が彼にそつと云つた。

「あの葉つぱね、ママの氣に入つてゐるのよ。ときどき、大原の葉つぱ見せて、て云ふの。」

「さう。でもそいつは困つたな。」

「え、何？」

「あれ實は一圓二十錢なんだよ。あまり安いんで何だか――。」

「まあ、そんなものなの。だけど――そんな事いいわ。何でもないことだわ。」

「さう思つてくれる人ばかりぢやないんだよ。さうは仲仲思へない人が澤山ゐるからね。」

妻の母は、三月ほど病床にゐたが、やがて奇蹟的に全快した。

二

それから二た月ばかり經つたある夕、大原と妻とは、僅かばかりの買物かたがた銀座を散歩してゐた。そしてもう歸途に就かうとしたときだつた、大原は不意に云ひ出した。

「やつぱり行つてこよう。このまま歸ると反つて氣になつて、それこそ一頁の讀書も出來やしないからな。」

「さう。ぢや行つてゐらつしやい。でも、隨分好きね。一層のこと將棋の先生になるといいわ。」

「なれるものなら、なりたい位だ。ぢや行つて來るよ。」

その日將棋の會のある事は、前から通知されてゐたので、彼はそれを一つの樂しみにしてゐた。しかし、當日になつて、さてとなると、流石にちよつと、會場の遠過ぎることが重かつた。會場

は、兩國驛から三十分ばかり汽車に乘る小さな町にあつた。彼はまだ兩國驛から汽車に乘つた經驗は一度もなかつたので、行つてみたい氣も多分にあつたが、不案内のところへ、それも大した用事でもあるのなら別だが、高が將棋でと家人に思はれてまで出かけるのは、さすがに重かつたのだつた。ぢや思ひ切るかといふと、さうもならず、到頭ぎりぎりの時間にやつと銀座で行く決心を固めたのだつた。

その町には大原の知合の有名な將棋の大家が住んでゐた。そしてそれを取卷く數人の同好者があつた。彼は其處へ飛込んで行つて、その晩戰ふのだつた。戰は大原に有利で興が乘りそれにひどく勸められもしたので、彼は到頭その晩その町に泊つてしまつた。

翌日は彼は朝から連中と將棋を指した。夕刻になつて彼が歸らうとすると、將棋の大家は彼を送つて東京まで出ようと云ひ出した。

「無理に泊めておいて獨りで歸しちや奥さんに濟まんからな。送つて行かう。」

「そんなにしなくてもいい。」

さう斷つたが、結局送つて來ることになつた。それで大原とその大家と、それに一人の有志が加つて、東京へ出た。大原の宅は東京の西郊なのでそこまでは大變だつた。皆で一緒に來ること

になつた。

「昨晩は無理に泊めましてね。それで奥さん、送つて來ましたよ。——電報屆きましたろ？」

大原の宅ではすぐ又將棋になつた。そして、やつと中盤どころまで指し進んだときだつた、彼の門前に不意な自動車がとまり、けたたましい呼鈴が鳴らされた。女中と一緒に大原の妻が玄關へ飛び出して行つた。——玄關で、入亂れた會話が聞えたかと思ふと、細君が座敷へ取つて返して來た。

「ちよつと——。」

「何？　其處でお云ひ。」

「パパが歿くなつたのですつて。」

「なに？——。」

大原は妻の顏を見た。妻は興奮の赤い顏をしてゐた。目が光つてゐた。

「稻ちやんが自動車持つて迎ひに來たの。」

「さうか。」

大原は妻を眺めながらちよつと當惑した。それで云つた。

「一人すぐ行つといで。俺はすぐあとから行くから。」
構はず彼は指し續けようと思つた。遠來の客の爲に、一番だけでも指し終らうと考へた。が、彼が次の駒を下すより早く、客の一人は云つた。
「こちらはお構ひなく。遲くなりもするからこれで御暇しませう。また改めて伺ひますから。」
「さうですか。でも——。」
「いやさうぢやありません。こんな時には二人で直ぐ驅けつけるものですよ。どつちか外出でもしてゐて、間に合はぬといふのなら兎に角、さうぢやなければ揃つて驅けつけるものですよ。」
そこへ妻が口を出した。
「わたし一人で行きますから、どうぞ其儘に。」
「奥さん、そんなことを云ふものぢやありません。是非御一緒にいらつしやい。私達も、ついでに自動車に途中まで乘せて行つて貰ひませう。その方がいいから。」
「さうですか。そいぢや何ですが、これで失敬させて貰ひますか。」
大原はさういつて、ぽつとした。危篤といふのなら兎に角、卒中で死に切つてゐる跡へ急いで驅けつけることは、まして一つの義理を欠いて別の義理を足すことは、よし事の輕重があつても

彼の平常の心持ちから云ふと若干不贊成でもあるのだが、其場は默つて彼は迎への自動車に乘つた。
自動車に乘ると急に嚴かな氣持が大原に湧いて來た。人が死んだのだといふ事がはつきり分つて來た。
「ねえ奥さん、これでもう一晩大原さんを泊めておくと大變なことになつた譯でしたね。何も知らずに明日あたりぼんやり歸つて來て、そいつは事だと驅けつけたんぢや、將棋さして家を空けた事が一度で分りますからね。」
かう將棋の大家が云ふと、もひとりの客が云ひついだ。
「將棋に凝ると死に目に會へんなんてね——いやさ、それは少し意味が違ひはしますがね、どつちみち、よくは云はれつこなしですからね。こんなときは、とても悪い口實でさあね。」
二人の客を途中で下して夫婦と稻ちやんきりになると大原は妻に云つた。
「この前は鎌倉だし——よくよく妙な日ばかりだね。尤も、今度は歸つてゐたのだが。これだつて、もう一汽車遲く歸りでもしようなら、やはり後から僕ひとり驅けつける事になるんだつた。」
「さうね。」

「そしたら、とても評判の悪い事だつたらう。しよつ中、出あるいてゐるやうで。――」
「あんまり出歩るかない方でもないぢやないの。」
「さうぢやないさ。――」
それ切り默つてしまつた。しばらくして何か云ひ繼がうと大原が妻を見ると、妻は自動車の硝子窓に當り出した小さな雨を見入つてゐた。どことなく頼りない夫のことなどを、父の死と一緒に考へてゐるやうだつた。
「――降つて來たんだね。」
「え、さつきから。」
「あんなに病氣だつたお母さんが癒るし、その時分は丈夫だつた人が急に亡くなるし――。」
「それあたしも今考へてゐたの。」
「ほんとに不思議ね。」
稻ちやんは男だが、時どき女のやうな言葉づかひをした。
行きつくと、妻は門のくぐり戸の鈴を手で押へ、音のしないやうにそつと開けた。全で重病人をでも見舞に來たかのやうだつた。その妻の氣持が移つて、大原も足音を忍ばせたが、一歩這入

ると家の中は思ひの外の騷音だつた。線香の匂ひが玄關に一杯だつた。
死者はまだ寢床に横にしたままだつた。妻の長兄が裂れをとつて死顏を見せてくれた。
その後で大原夫妻は色色な人に雜多な挨拶をした。大原は死者の血筋の人人に悔みを述べた。さうかと思ふと、他所から來た人の悔の言葉に禮を述べなければならなかつた。右向くと左向くとで彼の身分がぐるぐる變り、何となく落付けない存在だつた。
翌日の納棺の時には大原も手傳つて、死者の冷たい足を握つた。そして棺の前にぬかついて幾度目かの燒香をした。時が經つに從つて人の死んだことがはつきりし、悲しさが本當になつて來た。
彼が人氣のない玄關に坐つて、ぼんやり弔問者の名控へなどを見てゐると、そこへ妻と妻のすぐの姉が來た。妻は大原に云つた。
「香奠出すのよ。」
「さうか。」
「持つてゐる？」
「いくらか。」

そこに妻の姉が口を出した。
「あんたがたは小さいから少しでいいのよ。十圓でいいわ。」
「さうですか。それや――。」
姉が去ると妻は、
「横濱は百圓よ。ちい姉のとこも多分さうでせう。」と云つた。
「金の高の問題ぢやないさ。ある人は出すがいい。」
「ある人になつて見たいでしよ。」
「それも問題ぢやないさ。分り切つてゐる。」
妻の姉が香奠を包む紙を持つて戻つて來た。その時妻が云つた。
「花をあげたの、姉妹の名で、もつともあたしは一文も出さないで名前だけ出してもらつてあるの。」
「さうか。それは何うも。」
かう云つて大原は心もち妻の姉に頭を下げた。
「どう致しまして。」

姉は冗談にしてしまふやうに微笑した。
告別式の日、妻の長兄は大原に云つた。
「昨晩御親父がお出で下さいましてね、それを私が存じませんものですから大變失禮いたしました。」
「いや、どう致しまして。」
「思ひ違ひを致しましてね、おやぢが生前御懇意に願つてゐたお茶の宗匠でもあらうと思ひまして、すつかり失禮しました。傍の者に注意されるまでは少しも氣がつきませんでしたので。」
「いや。――」
――この父が後日大原に次のやうな事を云つた。
「――わしもお悔みに行つたのぢやが、仲仲立派で結構ぢやつた。だが、俺が一つ殘念に思つたのは、わしの花輪が佛前に飾つてなかつた事ぢや。」
「さうでしたか。花輪をおあげになつたのですか。しかし又、どうして飾らなかつたのでせう。」
大原は意外過ぎたので若干の憤慨を藏してさう云つた。
「いや、あげはせん。わしは上げはせなんだ。」

「ぢや――。」

「上げんものの飾つてないのは當り前ぢやと云ふのやろ？　それはさうぢや。ぢやがな、わしのつもりでは、お前がわしの名で上げておいてくれたらうと思つてゐたのぢや。そのつもりで行つたのぢやが、なかつたので殘念ぢやつた。」

「それは氣がつかぬことでした。」

「これからもある事ぢやからな。――あのとき内務大臣の花輪があつたな、わしの名であの三倍ものが欲しかつた。――」

父は茶の宗匠と間違へられたことなどは、氣にとめなかつたのか、すつかり忘れてゐた。――

告別式では、大原も親族の席に佇立して、會葬者に默禮してゐた。妻の長兄が可なりの役人である關係から、大原が寫眞で見知つてゐる政治家なども――例へば鼻目金で有名な前官禮遇とか鼻の穴の上を向いてゐるので記憶しやすい市長だとかも燒香してゐた。その中に交つて大原の兄も、しほれた紋附姿を現した。

燒香すると其儘親族席に這入つてとどまる人人があつた。その中には、妻の長兄の妻の里の當主もゐた。この人は伯爵だつた。伯爵夫妻は親族席の最前列に立たされた。――こんな事も大原に

は一寸分らない點だつた。伯爵だから多分看板になるのだらうとは思つたが、葬式といふものはそんなものでないやうに思へて仕方がなかつた。妻の姉なり、姉の夫なりが妻の長兄、つまり喪主につづいて立つていい筈だと彼は思つてゐた。死者の子供が先に立たないで伯爵が先に立つのは、大原の多少嗤ひたいところだつた。死者の血筋の又の又の者が、又の者より先に立つ理由は伯爵の有難味をおいて他には見當らないやうだつた。又の又の者が立ちはだかるなら、大原の兄も又の又として立ちはだかつていい譯だつた。たちはだからないのは、大原の兄が貧しい商人であるからだとしか受取れなかつた。或は若し故人とのなじみの深淺で行くなら、大原自身でさへ席末にだに立ち得ない筈かも知れなかつた。

内輪の者よりは客らしい客を先にするといふのなら、その謙遜の美德には十分頭を下げてよかつた。死者に一番遠いものが偶然先に立ちはだかつたのなら、それもそれでよかつた。ただ伯爵だけに、偶然とは云はせないものがあつた。事實偶然でもないのであつた。

「いろんな事が厭なものだ。いろんな厭なことがある。――貧乏なんかも厭だな。」

あとで彼は妻にさう云つた。

三

このあと、およそ一月經つた時だつた。大原と妻とは、雪の降る溫泉場へスキーに出かけてゐた。大原が先に出かけ妻が二日おくれて來、そして二日目の午後早早だつた、彼等は一通の電報を手にした。電文は妻の養父の急死を知らせるものだつた。あまりの意外が續くのに彼等は言葉がなかつた。

何よりの急務は歸る仕度をすることだつた。山の麓へ電報を打つて彼等は橇を命じた。時間表を調べると、一番手近かな列車にさへ五時間以上の間があつた。大原は仕度をすつかり仕舞ふと妻に云つた。

「ぼんやりしてゐたつて仕樣がないから、僕は名殘りの一と辷りを辷つて來るよ。」

「え、さうなさい。」

一緒に出かけた仲間は、

「これからだがな。」と云つた。「これからが面白くなるといふ時だがな。——しかし、外のことぢやないから仕方がない。」

「ああ。」

簡單に答へて大原は辷つてゐた。妻の養父が死んだといふのに、呑氣らしく辷つてゐて、とも思つたが大原は彼自身が死んだのでない限り、どうせ汽車の出るまでは、やきもきしても仕方のないことが分つてゐる以上、そんな半端な時間は辷つてつぶしてゐる方がいいと考へたがる男だつた。

「これきりだからな、うんと辷るんだ。」

彼は仲間にさう聲をかけた。

「ああ、うんと辷りたまへ。歸りが橇ならくたびれないし、さ。」

「だけど折角諸君を引つぱつて來て、すまないな。」

「あとが淋しくなるね。——だけど俺達ももう歸つてもいいんだよ。」

「これからだつてんぢやないか。」

「それやさうだがね。」

二時間ばかり辷ると彼は宿に戻り、橇にゆられながら停車場へ山を下つた。

「パパの四十九日も濟まないうちに、こんなところへ來たりして。——よつぽど止さうかと考へ

たのだけど。」
妻は汽車の中でさういふ事を氣にしてゐた。
「俺もよつぽど不思議だ。いつも遊んでゐる最中にこんな事にぶつかる。この前もその前も——實に變だ。」
「勉强なさるときより、遊んでゐらつしやる時が多いといふ事になるのよ。」
「結局さうかな。——それならそれでいいが、兎に角不思議だよ。何かやつぱり罰が當るのかな。」
「——だけど何ね、こんなに遊びあるいてゐると、のん氣に見られるわね。」
「金もありさうに見えるだろ。」
「香奠あつて？」
「あるもんか。宿料拂つて橇代拂つて、汽車の切符で丁度一杯だ。向うへ著いてタクシ代ぐらゐあるだらう。」
「今度は今までより一番金がいるわよ屹度。どうするの？」
「どうしやうもない。どうにかなる。」
「あなたの事だから何うせ例によつて、どんなことでも何うかなる、でしよ。」

「さうさ、それ以上は俺には分らない。」
大原は貧乏が好きでなかつた。しかし彼の妻は大原以上に貧乏がきらひだつた。貧乏そのものより、貧乏によつて生ずる體面問題を病的に恐怖してゐるやうだつた。月末に勘定取りが來ても大原なら無いものは無いで云ひ切れるところを、妻は云ひ切れないやうだつた。——
「冗談はおいて、本當に困つたわね。どうか出來ない？」
「出來ない事はなからう。——だけど此汽車が著くのは明日の未明だぜ。そんな早朝どうしやうもありはしないさ。困つたら小い姉にでも一時借りておくさ。どうせ使ひ途のない金持つて先に行つてゐるだらう？」
「なんだか始終のやうで頼み難いわ。」
「なんなら俺が頼んでもいいさ。あとで返せる事は確かだから。」
「そんな事云つたつて仕方がないわ。それより、行けば直ぐお通夜が續くから、一寸でも眠つておきませうよ。でもあたし眠れさうもない。」
大原も窮屈な手足の伸しやうで、眠れさうもなかつたが、それでも上野に著くまでには幾つかの驛を知らずに過ぎてゐた。

彼等は上野に着くと、手荷物はあり、粗末なスキー服のなりでもあるので、一先づ自宅に歸り服裝を改めて即刻出直した。

「まあお早うございましたわね。お疲れでございませう。」

居合せた人人は大原達にさう云つてくれた。しかし大原達は、遊びに出かけてゐたことで、何處かまだ心にひつかかりがあつた。

ひとしきり手ん手の挨拶で別れ別れになつてゐた大原と妻が落ち合ふと妻は直ぐ云つた。

「早速花輪よ、皆んなは注文したんですつて。小い姉も。」

「また名まへを出させて貰ふのだらう。」

「さうは行かないわ。それどころですか。小い姉曰くね、禮吉さんは今度は一人で大きなのを上げなけやいけないて。」

「さうか。ぢや注文してくれ。」

「またさうのん氣ね。お金どうするの。」

「養家と云へばうちも同然ぢやないか。何とか都合してもらへるだらう。」

「さうは行かないわ。第一かう混雜してゐて、それどころですか。」

「ぢや小い姉だ。貸してもらへ。それより仕方がない。早くしろよ。早く電話かけて注文しちまへ。」

「仕方がないわ。——それからまだあるのよ。今夜と明晩がお通夜ですつて。その人達に出すものをあたしたちが上げなくちやいけないのよ。小い姉のとこは大阪ずしか何かよ。」

「ぢやうちはしのだとお菓子にしろよ。」

「しのだとお菓子だなんて、それだつてないのでしよ？」

「ないのは分つてるぢやないか。愚圖愚圖云つたつて今さら始まるか。花輪と一緒に一先づ小い姉に願つちまつとけよ。」

わざとぞんざいに口利きながらも大原は酷く寂しかつた。何だか儘にならない事で一杯のやうな氣がしてならなかつた。それが皆一つの原因だと考へると——。彼は不意に父の言葉を思ひ出した。

——またあることだ。——內務大臣の三倍の花輪——。

いつそこれも小い姉か誰かに賴まうかと思つた。だが立て替は何うも口に出せなかつた。妻だけか父にも肩身の狹い思ひをさせる事を、ぢつと彼は嚙みしめてゐた。

大原は一隅に默つて坐つてゐた。養家に出入する人人は全然知らなかつたので、誰も彼も言葉をかけてくれなかつた。彼は何に手を出していいのか分らなかつた。手傳ひ手は澤山あるので、彼のする事はないやうでもあつたが、誰かが何かを命じてくれたらと彼は心で念つてゐた。妻の養母でも若し言葉をかけてくれたらと彼は幾度か思つてゐた。こんな場合、親しみの淺い目下から目上へはなかなか近寄つては行けないものだ。が目上から目下へならどんなにでも口が利けるものなのだ。何とか一こと云つてくれさへすれば、彼は取りつく島にすぐにとりつくのにと、大原は念つてゐた。——ぼんやりしてゐると妻が來て云つた。

「小い姉に頼んだわ。頼みにくくて困つたけど。小い姉も妙な顏してたわ。だつてスキーに行つてたりしたもんだから——。」

「それやさうだらう。一文なしで遊びに出かけたとはよも知るまいからね。世間の人といふものは、金がはひれば先づ貯めて、貯めて餘つたら遊びに出かけるのだからね。だからこれを逆に行くと、遊びに出かけるからには貯つてゐるんだらうとね、さう考へるだらうさ。無理もないが、無理があつてもなくても、ないものはないさ。」

「ないのに遊びに出かけてゐるとは——この月末の見當さへつかないのに遊びに出かけてゐるとは、まさか思はないのね。」

「思ふものか。さうと知つたら、莫迦だといふよ屹度。金もないのに遊んで何が面白ろかろ莫迦な、と云ふよ。その點世間の人は明瞭だよ。」

「雪の中へわざわざ物好きなと云ふんでせう、さう云はれて、お金借りるの、隨分つらかつたわ。」

「いい修業だ。買つてもする苦勞だよ。」

「いやいや、貰つたつて返すわ。」

「だがまあ、貯金帳のないなんて事は、あの人達には考へられないだらうからな。いざといふ時の仕度が、これくらゐさつぱりないとは夢にも思はんところだからな。思はんどころか、不安で不安で生活しきれん位だらうよ。家中探しても、大抵の場合五圓と餘裕のつかないところ、全く珍だらう。」

「そんなこと厭味たらしく威張つてないで少しは貯める工夫ね。」

妻は、たしなめるやうに強い調子だつた。

その晩はお通夜だつた。大原は前晩汽車の中で眠つてゐないのと、その前數日スキーの少し無理な運動の疲勞とが一緒に來て、とても座に堪へられない苦しさだつた。ともすると頭が前にが

くりとした。彼は宵張りの朝寝坊なので、大抵ならお通夜位に閉口たれるのではなかつたが其晩ばかりは參つて仕舞つた。眠むくなると彼は懐手した手で脇腹を抓つてゐた。痛いな痛いなと自分で思ひながら自分の手で抓つてゐるので、仕舞には自身滑稽で仕方がなかつた。昔の人が勉強する時に、眠くなると自分で腿に錐を立てたりしたといふ小學校の讀本を思ひ出したりした。彼は勉強の時にはまだそんな殊勝な經驗はなかつた、此お通夜で初めて經驗して苦笑するのだつた。

基督教なので、翌日教會で葬儀を執行した時には牧師の說教の間、前夜にも增して眠かつた。彼は大ぜいの中で居眠つてはと袴の下で腿を抓つてゐた。彼の隣りに掛けてゐる親戚の青年は、不意にがくりとやつた。大原は同情せずにゐられなかつたので、自分は腿を抓りながら、此青年の脇腹を肘で時時押してやつてゐた。

それから燒場へ行つて其處でまた幾度目かの祈禱があつた。祈禱があつて讃美歌が始まると、大原は急に無茶苦茶に悲しくなり、とめどなしに涙がこぼれて來た。彼は人に見られるのが厭で隅の小暗いところに凭り顏をかくしてゐた。

「さ、お別れなさい、皆さん。」

牧師がさう云つてゐた。棺の蓋が開かれ、人人は順順に死者の顏を覗き込みに行つた。が大原

は、もう澤山といふ氣で、行かなかつた。覗いて、もう一度涙を流すことなぞ、澤山過ぎるのだつた。一體何故基督教はこんなに度度棺の蓋を開けたがり、悲しさうな讃美歌をその都度唄ひたがるのだらう。悲しさが汐の引くやうに引いたあとで、また思ひ出させるやうな仕草——「遺されし者」の悲しさを大根おろしにかけるやうなむごい事を幾度やれば氣が濟むのだらう——大原は牧師を罵りたくさへあつた。睡眠不足で神經が疲れてゐて、彼は泣き易く腹立ちやすくなつてゐた。

妻の養父は立派な人物であつたらうが、それよれも立派な容貌を持つてゐた。いつか妻の養父の容貌の話が出たとき、大原は妻に云つた。

「ゲエテ型だね。日本人としちや、あれ以上の形ちは一寸ないかもしれない。あれでもう少しインネレ・シエエンハイトといふやうなものがあつたらね。」

「また知りもしない獨逸語ね。」

「とかく使ひたがる。——それは兎に角、立派な顏だよ。ゲエテと常陸山谷右衞門とを一つにして割つた見當に近いかな。」

死顏は生前より立派なやうに見えた。大原は、こんな顏の人が何故みづから死を欲したか、不

思議でならなかつた。

四

「どうせ何とか思はれついでだから、また出かけるよ。」

或日大原は妻にさう云つた。出かけるといふのはスキーに出かける意味だつた。思ひがけないことで中絶して、それだけに酷く未練が殘るのと、健康の爲にいい氣がするのとで彼は出かけたくて堪らないのだつた。妻には事後承諾にして、彼は友達と出かける事をもう約束してしまつてゐた。

「さう、何日頃から？」

「あす出かけるつもりだ。神速だらう。」

「神速はいいけど、お金あるの。」

「汽車賃と辨當代ほどある。滯在費は向うへ行つて何とか工夫するつもりだ。」

「そんならいいけど、——だけど埋葬式が二十二日よ。歸つて來られる？」

「來られるさ。明日が十七日だらう。十八日に着いて十九二十と二日ある。二十一日の夕刻に出

發すれば二十二日の朝、埋葬式には間に合ふよ。」

「まあ、そんなにまでして出かけたいの。ほんのちつとばかり。」

「また出なほすよ。二十二日の晩、埋葬式濟んで直ぐ出なほすよ。」

そのつもりだつたが、今度は友達の方が都合が惡くて、出發は翌翌日の十五日に延びる事になつた。それでは、なか一日しか居られない事になるので大原は仕方なしに埋葬式を濟ましてから出發することに改めた。仲間と賑かに汽車旅行してこそ面白いのだが、一人であとから追つかけるのぢや、いささか樂しさを削られるものだつた。

埋葬式の前日、妻が大原に云つた。

「あす花を供へたいわ。あげる人は皆告別式にあげてゐるから、明日は淋しいに極つてゐるわ、だから何とかして花をあげたいわ。」

「花か。よし、あした供へよう。」

「だつてもう汽車賃でさへもないでせうし——。」

「あした拵えるよ。」

「あすぢや駄目よ、花輪は今日中に注文しとかなけや間に合ひはしないのよ。」

「花輪作るて、そんなに暇のかかるものなのか？――が、まあいいや。今日だつて仕方がないのだから、明日金を拵えて、式までに間に合はせよう。引受けたよ。」

當日彼は早目に出て仕事先で前借をし、その近所の大きな花屋で、これから、一時間内に花輪が作れないかと訊ねた。

「それはちと無理で御座います。ここでは絶體に出來ません。が、ちよつと本店の方へ問合せてみませう。ひよつとすると出來るかも知れませんから。」

店員は本店に電話をかけてくれた。が、本店の返事は駄目といふのだつた。

「駄目かね。――それや駄目であらうが、そこを何とか行かないかね。墓地までは僕が持つて行つてもいいんだ。拵へてくれさへすれば、僕が本店へ取りに行つて、自分で運ぶから。もう一度交渉してくれたまへ。」

店員は又電話をかけて交渉してくれた。そして、取りに來てくれるなら作らうと話が纏つた。それを聞くと大原は他の仕事先へ廻り、そこでも金を手にし、タクシーを花屋の本店へ走らせた。――これで花輪も出來たし、今夜スキーにも直ぐ出發出來る――。彼は勇んで花屋へ飛び込んだ。花輪は出來てゐた。花輪と彼はタクシー一杯になつて墓地へ驅けた。

「あら花輪出來たのね。」

妻は嬉しさうだつた。大原は得意で、

「さうさ。花輪ぐらゐ何うかならないで何うする。」と云つた。

「いい景氣ね。自動車待たせておくの。」

「いいや、さうぢやない、返すんだ。」

彼は運轉手におつりはいらないと一枚の紙幣をやつた。

「それで今夜出かけるの？」

「出かけるよ。汽車賃も辨當代も、滯在費も出來た。當分行つてゐられるだらう。」

彼がまたスキーに出かける事は外の人達も、妻からでも聞いたのか、知つてゐた。

「面白いものですか。」

そんな事を大抵の人が訊ねた。

「面白いですね。一度辷つたら、辷らなくても轉んでも、忘れられないものですよ。溫泉に浸つて、スキーをやつて、それで東京にゐるよりは結局安上りなんですから、素敵ですよ。」

埋葬式が濟むと大原は急いで家へ歸り、仕度をした。

「これに行つてらしたら、少しは働くことにしませうね。」
「あ、さうしよう。」
「あんまり貧乏も厭ですから。いつ香奠がいるか分らないから。」
大原は豫定通りその晩出發した。だが何故だか此前ほど愉快ではなかつた。心が、浮き立たさうとしても、沈みかけて仕方がなかつた。——何か不自然がある、さういふ氣持ちだつた。

五

目的地では、先發した仲間がさかんに滑つてゐた。大原も敗けずに滑り出した。
雪質は此前より惡くなつてゐた。水氣が多くてスキーの裏へこびりつくやうだつた。やたらにパラフインを塗つても、それでも滑りがよくなかつた。クラストが出來てゐて思はぬ轉びやうをしたりした。
「雪質が惡いぜ。」
「惡いとも。あざらしの皮つけてるやうだ。」
本當に、雪がスキーに抵抗して仕樣がなかつた。

雪がスキーに抵抗するやうに、大原は何か心に逆か目立つものを感じてならなかつた。何か不自然がある、それが自分の生活にあると云つて仕舞つては、味のなくなるものだつた。
「大原、また電報が來るぜ。」
仲間の一人がさうからかつた。
「うん、三度あるとは四度あるかも知れんて。今度もし電報が來たら、俺はもう一さい遊戯はお廢しだ。」
「大げさだね。そんなこと云つてゐると本當に來るぞ。」
大原は全く、また電報でも來やしないかと、びくびくものでゐた。ひよつとすると來さうな氣もちがしてならなかつた。妻の急死でも知らせて來さうでならなかつた。妻が死んだら、これは香奠の心配はいりさうもなかつた。が肝心の葬式が出せるかどうか、出せる當は少しもなかつた。葬式どころか、寢棺一つさへ買へさうもなかつた。
「お前が死んだら、庭の隅に埋めてやるよ。犬や金魚なみだ。」
「今どき土葬は駄目よ。許可されないわ。」
「それは大變だ。」

「犬や金魚より不便な譯よ。さうは手輕に行かないだけ困りものね。」

こんな妻との會話を思ひ出した。

彼は猛烈に雪の斜面を滑降しだした。

（十五年）

兄との關係

一

兄の手紙を見ると麟は直ぐ返事を書いて、いろいろの話とはどういふ話なのかもう少し詳しく知らせて貰へないかと云つてやつた。しかし兄は何とも知らせて呉れなかつた。麟は又手紙を書いた。それにも兄は返事を呉れなかつた。麟はじりじりしながら、結局自分で出向くより仕方がないと決心した。だが麟は或る會社へ入つたばかりで、少し勝手が利かない上しかもやや責任のある地位に就いたので酷く多忙だつた。なかなか京都まで出かける暇が見出せなかつた。麟が都合のつく限りをつけて、やつと東京驛から立たうとしたのは、兄の手紙ののち約一ケ月たつてからだつた。

その間、兄の手紙は幾度となく麟に讀まれて、竹中彪と書かれた裏書も、竹中麟殿とある表書も著しく毳立つてゐた。手紙は幾度讀み返してみても麟を不安にする以外に役立たなかつた。「どうしても順子と結婚するとお母さんに云つてゐるさうだが、それについてはいろいろ話があるから一寸來ないか。」手紙は修辭を除くとこれだけだつた。毳の立つほど讀んでも、最初に一閲した

時に受取つた不安に寸毫の增減を示さない手紙だつた。さうして、麟の水落を時時きゆうと締めつける手紙だつた。それは竹中彪といふ兄の名の爲ではなかつた。手紙自身の爲では決してなかつた。順子、唯その名から浮いて出る連想の爲だつた。順子、その爲に麟はきゆうとする水落に手紙を時時抱きしめた。

二

麟は寢不足の蒼白い顏を京都驛頭の朝に曬したとき、これから直ぐ兄のところへ行つたものだらうか、それとも、と考へた。實は麟が辛うじて京都に來る都合をつけ得たのは會社の用件を兼ねることによつてであつた。だから、それともとは、兄のところへ行かうかそれとも社用を先に形づけようかの意だつた。麟はどうせ兄の家に一泊するつもりだつたので、社用を先にすることにした。彼は京都の東へ、約二里ばかりのところ迄急いだ。其處で用事を形づけて歸らうとすると、別の來客があつた。來客は麟の知らない人ではなかつた。で一旦上げた腰を又下した麟は、悠り夕方まで其處にゐた。來客は、

「ひどく蒼い顏をしてゐますね。」と麟に云つた。麟は微笑を習慣的にした。

「寢台車ではとても眠れないのです。」

その蒼白い顏を麟が三條大橋まで運び戻して來たとき、既に日暮の街には灯が連つてゐた。北山一帶を見ると靄は頂きを僅かに殘して悠悠と暮れ合つてゐた。一旦東山を大津への途中まで京都を離れて行つて來た麟は、これから更に北山の方へ二里以上も離れて入つて行かなければならなかつた。北山の靄を見て、あの物寂しい山の中に住んでゐる兄を思ひ浮べ、あの山の中まで自分が行くのかと考へるとき、憂鬱な麟は突如として疲勞に取卷かれて來た。

もう乘合自動車は勿論ない時刻だつた。しかし今夜一晩京都に空費するのは多忙を拔けて來た麟のなし能はざるところだつた。彼は不相應に高い賃金を自動車屋に拂つて、普通の車を出させた。京都の街を出離れ、野路も盡きてしまふと、とつぷり暮れた山間だつた。路に添つて溪の音がした。山が段段深くなつて急に冷氣が襲つて來た。向うから來る牛車とゆつくり麟の自動車は身をかはした。杉並木の壓してくる暗さと、肩に沁み入る冷氣とに、麟の神經が極端に疲れた頃、自動車は麟が下りていい地點まで來てゐた。

爆音で兄の娘が田舍者の顏を門口に出した。

「兼子。叔父さんだよ、忘れやしまい。」

麟は笑顔と、割に元氣な聲を姪にかけて格子戸を入つた。兄は奥に坐つたまま聲をかけた。

「麟か。」

「遲くなりました。」

麟は灯のない空洞のやうな玄關で答へると直ぐ奥へ通つた。

「けふは來んと思つてゐた。乘合もなくなつたしな。寺町に泊るのかと思つてゐた。——雇つて來たのだね。」

そこへ嫂が青くむくんだ顏で二階から下りて來た。彼女は階段を下り切らないうちから聲をかけた。

「ようお越しやす。」

嫂には癲癇の發作があつた。持病は癲癇だけではなかつた、脚氣があつた。それで寢たり起きたりの生活だつた。廢人と云ひ切つていい程の嫂だつた。兄がこんな山の中に引込んでゐるのも、人と接する機會の多い、刺戟の强い町中が嫂に惡過ぎるからだつた。定職がなく、僅かに生活し得るに過ぎない兄の經濟狀態の爲もあるにはあるが、此廢人が兄を餘儀なく山の中に住ませるのに違ひはなかつた。兼子は山の中の小學校だけで、あとは看護婦になつたのと同じだつた。彼女

はすつかり田舍臭い小娘になつて嫂の看護婦だつた。

麟は嫂の顏が正視出來なかつた。青くむくんだ顏に間を置いて二つの澱み切つた目が、見開かれてゐた。東京にゐても麟の時時魘される顏だつた。——

兄夫婦、兼子、麟の四人は默つて一つの火鉢に手を出してゐた。兄は無口な男だつた。麟も兄に讓らない口不調法な男だつた。茶を入れながら、菓子をすすめながら嫂が仕かける用のない話題だけが、それも時時沈默を破るに過ぎなかつた。

「わざわざ一臺出させたら、高うつきますやろ。」

嫂の訊いてゐるのは自動車賃の事だつた。

「可なり取ります。山の中へ來るのですから。」

麟がさう答へると、兄が口を挿んだ。

「俺なら歩くよ。乘合の十五倍も出せんからな、今時の若い者は無駄ばかりするわ。」

兄は不思議な訛を交へて、ひどく老人くさいことを云つた。

「晴子、お前はもう寢たらいい。」

しばらくして兄は嫂にさう云つた。そして嫂が何か云ひさうな前に、

「麟、お前も今夜は早く寢るがいい。疲れてゐるだらう？」と云つた。
山の中の更け方は早かつた。灯がつけば夜だつた。宵はない生活だつた。いきなり夜の山の中へ飛び込んで來た麟には、家中の凡てのものが陰慘に見えて仕樣がなかつた。嫂が兼子に助けられて、やつと二階へ上つたとき麟は兄に云つた。
「暗い晩ですね。」
「うん。」
さう答へた兄は、暗いといふ言葉につられて、反射的にランプの芯を大きく出した。
「嫂さんが二階に寢てゐるのは不便ぢやないんですか。」
「うん。でも、二階の方が下より乾燥してゐていいのだろ。」
兄は面倒臭さうに云つたが、一寸調子を代へると、
「麟。何かお母さんから訊いたか。」と云つた。麟には意外な質問だつた。
「お母さんが何か知つてゐるのですか。」
「訊かなかつたのだね？」
「御存じだつたら訊くのでしたが。」

「いや。知つてゐる譯はないがね。」
麟には兄の云つてゐることが分らなかつた。いかにも母が知つてゐさうな口振りが最初の質問に匂つてゐた。だが兄は直ぐ、知つてゐる譯はないと事もなげに云つてしまつた。それのどちらが本當だか麟には分らなかつた。麟が訊かなかつたと云つたので、取消したのだらうか。麟は兄に訊いた。
「何のことですか。」
兄はしばらく返事をしなかつた。さうして突然別な方へ持つて行つた。
「明日の晩歸るのだね。」
「さうです。」
「ぢや、寺町へは寄つて行けないね。」
「いや、寄るつもりです。どのみち、ここの歸り途ですから。」
「寄るのか。——」
兄は一寸言葉を切つてから、
「今夜はもう寢ようぢやないか。お前も疲れてゐるだろ。」

「そんなでもありませんが、ぢや寢ることにしますか。」
麟は、今夜はどうせ何も訊けないと思つてゐた、兄はもとより話す氣を持つてゐさうもなかつた。
兄弟は並んだ枕に頭を置いた。
庭の泉水へ落ちる筧の水音が麟の耳についた。ちかちかとする神經は筧の音と調子を合はせて多少の熱を後頭部に持つて來た。麟は、可なり眠いくせに眠られぬ頭で不意と、兄が先刻云つた言葉を思ひ出した。
今時の若い者は無駄ばかりするわ、か。——そんなら兄自身はどうなのだ？　兄自身はと考へ出したとき、暗闇の床の中で思はず微笑を浮べた。
兄は昔遊蕩兒だつた。彼はよく馬に乘つて遊びに出かけた。定紋打つた馬乘提灯に火を入れてゆつくり東へ行く兄を麟は幼い目で記憶してゐる。一家は破産する前の狀態にあつた、その中で兄は摑めるだけの金を摑んで遊びに出かけた。茶屋の拂ひが大ぶん溜り、さうして茶屋が彪一家の經濟狀態を知つて危ぶみかけたとき、兄は、
「さうか。そんなら拂つてやらう。」と云つた。「金を拂へばいいのだらう。金ならどんな金でも受

取るね。」
「そらもうお金なら。——」
茶屋のお上はさう答へて、しかし答へが少し現金過ぎると思つたのか直ぐ冗談めかして附加へた。
「——金は金だが延金だアでは困りますけど。ほほほ。」
その夕は兄は馬背に風呂敷包と一緒に乘つて茶屋に出かけた。
「拂ふぞ。」
兄はさう云ふと、風呂敷包を解いた。中は其頃は立派に通用してゐた一文錢と鍋錢との山だつた。兄は錢通しから拔いてばら錢にしたのを風呂敷一杯に持ち、右手で丹念に座敷の片隅から青疊の上に並べ始めた。お上も女中も「まあ。」と云つたきり兄の仕草を眺めてゐた。兄は冗談氣を微塵も顏に現はさず專念に一文錢を並べた。座敷一杯にひろげて、廊下をうしろむきにすさりながら兄は並べた。——兄はかういふ片意地なところを持つてゐた。
朝鮮に神官をしてゐる親類があつた。其處から兄に祭禮用の神輿を買つて呉れと依賴して來たことがあつた。

「妙なことを頼まれるものだな。朝鮮でかつぐ神輿など何でもよかろに。」

兄は依頼通り神輿を買つた。そして荷造りして送らうとしてゐる時だつた。兄は不意に金が必要だつた。兄は何の躊躇もなく質屋に入れてしまつて所用の金を間に合せた。朝鮮からは度々催促が來た。兄はようやく神輿を質屋の藏から出すことが出來た。朝鮮からは直ぐ禮狀が來て、秋に大祭があるから遊びに來ないかと云つて寄越した。兄はもとより行かなかつた。さうして秋になると兄は突然笑ひ出した。

「おもしろいな。質に入つた神輿を今頃擔いでゐやがると思ふと――ははは。面白うてならん。」

兄にはこんな方面もあつた。麟は兄も無駄なことをしなかつた譯ぢやないと寢床で考へてゐた。

三

翌朝京都へ出向くとき、兄は歩いてゆくと云ひ出した。乘合に搖られて行くよりは、こんない天氣には歩いた方がいいと兄は云つた。麟は同意した。その方が問題に觸れる機會が多い筈だからと思つた。

兄は玄關に出ると裾を端折りながら、

「麟。お前も捲くれ。」と云つた。

麟は云はれる通り裾を端折つた。兄弟は四本の脛を並べて早春の山路を下り始めた。路は、昨晩來るときと同じ杉並木の下だつた。溪流も同じ音を足の下で立ててゐた。何處か未熟な午前の光が、高い梢から落ちてゐた。蔽ひかぶさる杉並木が盡きて、山峽がやや開けて來ると黑のソフト帽に直接な日が差して、辷り皮の下が輕く汗ばんだ。

「今夜どうしても歸るね。」

兄はしばらく歩くとさう云つた。

「歸らねばならないのです。」麟は思ひ切つて云つた。「――で、例の手紙の話なのですが。――」

「あれか。」

兄は頭になかつたかのやうに無造作に云つてのけだが、暫く無言の後、「分つてゐるよ。」とつけ足した。と直ぐ又、

「おい麟。」と呼んだ。

「だけど麟。順子には子供があるぜ。」

「それは知つてゐます。」
「知つてゐるならいいが。——誰の子供だか知つてゐるかい？」
麟は愕然として兄の顔を見た。順子の子供は勿論順子の前の夫——夫ではないかも知れないが、さういふ男の子供ではないのか。麟は兄の問ひの前に茫乎とした。すると兄は麟に苛棘としか見えない一瞥を投げて直ぐに言葉を續けた。
「俺の子供だぜ」
「え？」
麟は自分の耳を信じかねた。「本當ですか？」と尋常極まる疑問を眞劍に投げた。
「それ見ろ。」兄は眉も動かさずに云つた。「もう瞞されかかつてゐるぢやないか。」
麟は兄の顔をもう一度見た。兄は「おい。」と麟を呼んだ。
「おい麟。お前人の心が分るか。分るまい。順子は女だぜ。お前はお母さんに順子の心は分つてゐますと云つたのだらう？　何故そんなことを云つたのだい。現に今兄の俺に瞞されたぢやないか。——あれは俺の單なるいたづらにお前が乘つたのぢやないぜ。俺がお前を瞞したのぢやないのだ。順子だぜお前を瞞したのは。お前が今愕いたのは、俺を信じてといふよりは、或はと順子

を疑つたからだらう。それが、順子にお前が瞞され得る證據ぢやないか。」
麟は今さら兄から說法を聞きたくはなかつた。そんな事は麟にとつて過去の問題だつた。麟が兄から聞きたいのは手紙にあつた「いろいろな話」だつた。麟は聞きたいばかりではなく云ひたいことが澤山あつた。彼は兄の說法を阻止しようと試みた。
「その程度のことはどうでもいい事でせう。人間には全然疑ふ氣も瞞す氣もないものだと僕は云はないのですから。」
「さうか、——だが何時かお前が激怒したことがあつたらう。あの時のお前の手紙を俺はよく覺えてゐるよ。お前は彼女がかう云つたからかうだ。ああ云つたからああだ。その何處に兄さんは疑ひを挿むのかと個條書きにして俺を詰問したぢやないか。俺はあの詰問書をみてお前を愛しただけだつた。で、あれはお前が彼女を信用してゐるといふ證據にはなつても——證據になるだけぢやないか。それ以外に役立ちはしないさ。」
麟はもどかしくなつた。この邊で低徊されてゐては堪らなかつた。
「それや、僕はその程度に莫迦でせう。だが今はもう分つてゐることです。——」麟は句切りをつけて云つた。「いろいろの話て何ですか。それを——」

兄は、思ひがけなく微笑した。
「麟。ははは。今いろいろの話をしてゐるぢやないか。」
「でもこんな事は――」
「お前は話を聞きに來たのだらう。ぢや聞いてゐればいいぢやないか。これも、いろいろの話のうちの、いかろ位に當る話なんだよ。」
「ぢやあ――聞きませう凡て。けど僕は忙し――氣も忙しいしするから、事實を云つて下さい。抽象的な議論なんか。」
「事實か。根のあることだね。皆俺のいふ事は根のあることだからね。――では、と、今度伏見の小母さんに會つたかい？」
勿論會つてゐる譯はなかつた。疎遠で、それに今度のやうな忙しい旅にそんな訪問を麟がしないのは兄に分つてゐる筈だつた。――伏見の小母といふのは彪、麟兄弟の死んだ叔父の妻だつた。
「會つてるものですか。僕は京都へ著いたばかりです。」
「小母は片目つぶれたのだよ。こなひだ俺は訪ねてみて驚いた。――何故つぶれたのか知つてるかい？」

「知るものですか。」
「分らないだらう。痳毒なんだからね。」
兄はかう斯道の醫者のやうに慘酷に云つた。麟は、だが風眼がどうしたのだといふ氣もちしか起らなかつた。
「それがどうかしましたか。――第一、そんな必要以外の話は聞きたくないのですが。」
「だからお前は駄目なんだ。それがどうしましたか位の事ぢやないのだ。それにそれは順子にも關係してゐる必要な話なのだよ。」
「本當ですか。」
「小母はね――」
兄は云ひかけて傍の小さな神社を指した。
「あすこで一寸息まう。」
麟は兄のあとから拜殿に腰を下した。
「小母はね、叔父の死後何してゐたと思ふ？――叔父と小母とはむかし駈け落ちをして一緒にな

つた人達だぜ。その小母が――分るかい。叔父の死後何して暮したと思ふ？　分るまい？　小母はね、養女があつたらう、美代といふ子、あの子を賣つて食つてゐるのだぜ。妾といふよりは高等内侍だね。旦那が絶えず變るのだから。小母は美代を賣つただけぢやない。自分も――」

「本當ですか？」

麟は思はず口を入れた。

「本當さ。自分も賣つたのだぜ。養母子が一つ屋根の下でそんな事があると信じられるかい。そして痳毒で失明さ。」

麟は脛を拜殿の階段に投げ出し、ぼんやり自分の脛を眺めてゐた。よく見ると脛の毛に白い埃が花のやうに纏つてゐた。――脛から目を離し、しばらくして云つた。

「さうですかね。だが皆が悪いのですね。小母さんだつて好き好んでの事ぢやないに違ひありません。第一、叔父さんの保險金だつて小母さんに渡らなかつたつて聞いてゐますが、――そんなに皆でいぢめたのでせう。」

「さうさ、それやさうさ。生活さ。だがねそんな事はどうでもいいのだ。俺は小母さんの片目だけ潰れたことを云へばいいのだ。――お前も歸りに伏見へ寄つてみろ。京阪線の墨染といふところで下車してすぐだ。竹林の中の妙な家に住んでゐる。墨染に有髪の尼ありさ、――風眼ぢやちと困るだらう。伏見へ行つてあの目を見て來い。女を信ずる氣がなくなるぜ。おい麟。」

女と呼んで順子を侮辱してゐる兄の言葉だつた。が麟は兄の無禮を咎める氣にもならなかつた。親類中がどんな態度で小母を遇したかそれは分り過ぎてゐた。麟は、しかし此處で義憤を發することは止めた。兄も小母を遇する親類中の態度には憤慨してゐるらしかつた。麟は肝心の問題を急ぐし、それに兄の口吻は小母一人を嘲るものではないので、何も云はぬことにした。さうして婉曲な抗議として、

「だが順子の話はどうなるのです？」と云つた。小母は墨染の竹籔で何うしようと、だから世間一般の女を不信用とするには當るまい、まして順子にとつては小母の話は何の關係もないぢやないか、といふ麟の意を、暗に通はせたつもりだつた。

「をかしな奴だな。そいつを今話してゐるぢやないか。さうだ――も一つここに根のある話があるがね、順子も近近に金持になるのだぜ、知つてるか。」

麟はもとより知らなかつた。兄は話し續けた。

「順子の子、つまり一郎だね、あれが小學校へ通へる年になると、一郎は父親の實家へ引取られ

ることになるのだ。その代りそれまでの養育料として一萬圓だつたか三萬圓だつたか呉れるといふのだ。一萬と三萬は少し違ひ過ぎるがどつちだつたか今一寸忘れてゐるがね。ともかくどつちかの金額なんだ。近近と今云つたが、尤もそんなに近近一郎が小學生に育ち上がる譯もないがね、死ななければや大きくなるに決つてゐるからね。金持になるのは確かだよ。だから寺町ぢや、お政なんか大よろこびさ。——どうだ。いやな話だらう。」

寺町とは順子の家の所在地だつた。お政と兄の呼ぶのは順子の母だつた。お政つまり彪、麟兄弟の伯父の連れ合ひだつた。兄は大抵の女性を蔭では呼び捨てにする癖があつた。

「何でもない話ぢやありませんか。」

「大ありだよ。順子が何故今でも結婚しないか知つてゐるかい？」

麟は、僕の爲でせうといふ代りに、

「良緣を待つてゐるのでせう。」と云つた。

「お前の爲ぢやないのだぜ。」

兄は肚を見すかしたやうに云つた。これは兄一流の毒のない毒舌だつた。だから麟は唯ふんと云つた。

「一郎を引取る時金を呉れると云ふのにはね、それまで再緣しないことといふ條件が付いてゐるんだ。つまり先方が狡いのだよ。あの變な男が突然外國へ飛出しちまつて歸つて來やしないやね、これが歸らず仕舞だと先方ぢや一郎が酷く大切になる訣だらう。その大切な一郎の母親に再緣でもされて一郎が他人の手へ渡るのは危險だらう。それにもし——」兄は一寸言葉を低くした。「あの變な男が外國から不意に歸つて來でもしてごらん、順子が再緣してゐると何がどうなるか、少し複雜になり過ぎるだらう。かたがたといふ訣さ、ここまでおいで甘酒進上といふ釣りの一手だよ。」

「ぢや順子は金の爲にぢつとしてゐるのですか。兄さんはさう云ふのですね？」

兄は迷惑な顏をした。

「さうは云ひやしないよ。俺は唯、順子はぢつとしてゐれば金が貰へるのだといふ事だけを云つてゐるのだよ。順子は勿論それを知つてゐるといふだけの事だよ。」

「ぢや、順子がぢつとしてゐるのはあの男が歸るかも知れないといふ氣がいくらかでもあるからだと云ふのですか。」

麟には少し訊ね難い問ひだつた。しかし彼は毛脛の埃に目を落したまま訊ねた。

「さうは云はないさ。順子はあの男は、嫌ひだと云つてゐたからね。今でも云つてゐるからね、だけど――」

ぷつりと切つて兄は煙草に火をつけた。ゆつくりと吸ひ込んで、こんどは非常な勢ひで鼻の前を煙だらけにした。

「どうだと云ふのです。」

麟も煙草に火をつけながら云つた。兄はもう一度煙りを吐いてから、

「麟。お前は後家がどの位金を大事にするか知つてゐるかい。俺でも想像の外なんだからな。お前にはとても分るまい？」

麟はこれは自分にも分つてゐると思つた。大分以前だつた。麟の友人が京都へ遊びに來てゐたことがあつた。このとき友人は金に多少困難を感じて來たので、東京の麟のところへ金を送つてくれないかと言つて寄越した。これは曾つて麟が此男から借りつ放しになつてゐる金があるので實はその催促だつた。麟は友人に責任を感じた。が其時麟の手許には金が乏しかつた。彼は友人の三本木の宿のことを考へると、そこから四五丁の距離にある寺町を連想した。で麟は直ぐ寺町へ手紙を出して三本木のこれこれへ金を屆けてくれないかと金額を申しやつた。それ位の金は何

でもない寺町の事だから何とかしてくれるだらうと思つてゐると、五日たつても返事が來なかつた。承知したとも何とも云つて來なかつた。麟が寺町め不親切だな、云ふこと聞いてくれないのかと思つてゐると、ある日三本木の友人から手紙が來て、それには寺町から屆けて貰つた、御手數有難うと書いてあつた。麟は友人の手紙を見てからそれぢや寺町からもう何とか云つて來るだらうと考へたが寺町は何も云つて來なかつた。金持ちだからこつちで考へてゐる程に考へてゐずそんな事でわざわざ手紙を出すのが面倒なのだらうと麟は判斷したのだが、それから暫くたつて他の用事で先方から手紙が來たときも、金の事は少しも書いてないので、初めて麟は妙だなと感づいた。金のことは云ひたくないのだな、それだけに金に拘泥してゐるのだな、二度と麟から余計なことを云つて來ないやうに避けてゐるのだな、吝な奴だなと麟は思つた。

麟がこの事を告げると、兄は笑ひ出した。

「さうだらう、お政てそんな奴だよ。後家だからね。お政でなくても後家は皆さうだよ。順子だつて謂はば後家だぜ。何しろ後家から金と色氣を拔いたら後家ぢやなくなるから酷いよ。」

麟は兄のかうした話をもう聞いてゐたくなかつた。それに京都へ行きつくのが遲くなるのが厭だつた。麟は早く寺町へ行つて順子にゆつくり合ひたかつた。

「そろそろ出かけようぢやありませんか。」
「よかろ。」
麟の聲に應じて兄も拜殿から腰を上げた。拜殿から街道に出るまで、づつと櫻の木が植つてゐた。見あげると梢は可なりに芽をふくらませてゐた。
「櫻落葉の時分になると此境内はとてもいいぜ」
兄はかう云つて閑寂な境内を見廻した。麟も兄にならつて頸を動かした。兄弟はまた四本の脛を並べて歩き出した。京の街へ入るまでにはまだ二里近い路がある。麟は足許にあがる薄い埃りにかすかな疲れを感じてゐた。

四

京都へ入つた。家つづきになつて來た。兄は羽織の下から手拭を出して埃まみれの脛を拂つた。そして「そら」と云つて手拭を麟に拋り出すやうに渡してくれた。麟も兄にならつて脛をはたはたと拂つて裾を下した。
「麟。これからどうするつもりだ。」

兄は意外なことを訊ねた。麟はこれから寺町へ行くつもりでゐた。その途中もその後ももつと兄からいろいろの話を聞くつもりでゐた。兄は勿論いろいろの話を聞かせてはくれた。しかしそれは麟の豫期したやうなものではなかつた。麟に云はせればどうでもいい話ばかりだつた。
麟は兄はどんな顏して云つてるのかと思つた。
「寺町へ行くのぢやないのですか。兄さんはそのつもりぢやないのですか。」
「行くには行くがね、お前が東京へ歸つてからだ。今夜家へ歸るのは遠過ぎるからね。何時もの通り寺町へ泊るつもりでゐる。」
「ぢやその間どうするんです。」
僕を京都見物にでも引つ張り廻すつもりですかと麟は訊きたかつた。
「芝居にでも行つてみようぢやないか。どうせお前は十時頃の汽車に乘ればいいのだらう。」
「芝居ですつて？」
麟は兄の眞意を捕捉するに苦しんだ。僕はそんなことは厭です、それより寺町へ獨りで行きますと麟が云はうとしてゐると兄は、
「順子はゐないぜ。」と云つた。

「なぜ？」

麟は兄の言葉の意外さに驚いた。順子がゐないといふのはどういふ意味か分らなかつた。それを今まで默つてゐた兄の衷懷に到つては推諒の外だつた。彼は茫然と兄を見るよりほか仕方がなかつた。

「城の崎へ行つてゐる。ゆとう屋に泊つてゐるさうだ。輕いリョウマチでね。」

麟は何故それを今まで敎へてくれなかつたのですと聞くことも忘れてゐた。すると兄は、

「お前は知つてゐると思つてゐたよ。順子から手紙でも行かなかつたかい。」と云つた。

かう云はれて麟は急に頰の紅くなるのを感じた。順子から或時は忘れられる自分だといふことを兄に知られたのは麟の少からず參つたところだつた。彼は辛うじて云つた。

「僕が東京を出たあとに着いてゐるかも知れませんが。」

「順子がゐなければ寺町へ行つても仕方がないだらう。お政は厭だらう？　後家だぜ。」

麟は苦笑した。

「厭は厭でも、でも――」

「でも、どうだと云ふのだ。さうは行かぬと云ふのかい。お政なんか何でもないぢやないか。」

「將來、しかし――」

兄は「おい麟。」と大きな聲を出した。

「麟。お政と將來何等かの今以上の交渉が生じるから、さう疎遠には出來んといふのかい。――まだ分らないね。お前、順子は駄目だぜ。もう酷く年老つてゐるし、お前が以前見た目で今も思つてゐるとしたら大違ひだ。それに――いろいろ話があるよ。」

麟は自分の頭が急に惡くなつたと思つた。兄は何のつもりでこんなことを云つてゐるのだらう、さうして自分は何ういふ意味にそれを取つてゐるのだらう。兄は順子と結婚したいといふ麟に不賛成らしい、それは兄が「一寸來ないか」と麟に云つて寄越した手紙にも書いてあつた。その手紙には、それに就てはいろいろの話があるからと書いてあつた。麟が其爲わざわざ無理な都合をつけて東京からやつて來ると、兄の話は直接麟の大問題に觸れぬことばかしだつた。兄はわざわざ自分を呼びつけて何を云はうとするのかしらと麟はいぶかつた。寺町へ行くことさへ餘り行かせたがらないのは何ういふ譯なのだらう。兄が順子と兄を結びつけまいとしてゐるのは分る、しかしそれは手紙ででも分つてゐた簡單な事實だ。いろいろの話とは勿論その理由を意味してゐるに違ひない、さうでなければ無意義だ。兄は理由の存在することを匂はすが遂に何事も語らうと

はしない。麟から云はせれば、兄は單に世の中の女性の信用すべからざるを漫然述べてゐるに過ぎない。麟にはさういふ一般論は不必要だつた。麟は今兄が吐いた「いろいろな話があるよ」といふ口癖の如きを捕へて、一歩肉迫しようとした。

「はつきり云つてくれませんか。順子がいけない譯を。」

さういふ麟の顏の何處が怪しかつたのであらう、兄は不審さうに弟を見て云つた。

「何を此上訊き質したいのだい。」

「理由です。」

「理由？　あれだけぢやいけないかい。隨分云つたつもりでゐるがね。」

「だけどあれは順子のことぢやないでせう？」

「どうしてだい？」

「どうして？」

麟はまた自分の頭の怪しいのを感じた。兄は兄の主張する如く、既に理由と目すべきものを語つたのだらうか、さうしてそれを自分は聞き逃してゐるのだらうか。兄は墨染の小母のことを語つた。後家と金と色氣との事を語つた、寺町のお政を攻撃した。しかし麟が順子と結びついては

ならない理由は、一體何を語つたらう、ちつともそれらしいものを述べなかつたのではないか。

麟はなほ腑に落ちぬ顏をした。

「麟。お前は具體的に、それも個條書きか何かのやうに聞きたがつてゐるのだらう。しかしそれは俺から云へないよ。唯お前は默つて東京へ歸つたらいいだらうと思ふのだ。明朝東京へ着く迄には分るだらう。」

兄の此口上は鐵のやうに冷たかつた。冷たいばかりではない、鐵のやうに固かつた。麟はやうやく鈍くなつた頭で一つ決心した。兄からはもう何も聞くまいとするつもりだつた。兄は麟の表情の動かないのに無頓着らしく、

「麟。芝居へ行かないか。」と云つた。

麟は人形以上に意志を失つてゐた。同時に人形以上に他の意志に影響もされなかつた。彼は默默として兄の動くやうに動いてゐた。

五

南座は紛然と動いてゐた。それには麟は無關心だつた。唯彼を極端に驚かせたのは幕間に寺町

のお政に出會つた事だつた。麟は蒼ざめた顏で兄に訊ねた。
「偶然ですか。」
「電話をかけたのだよ。」
兄は平然としてさう答へた。麟は憤怒に近いものを此時感じた。麟を寺町へ行かせまいとしたのは兄だつた。順子が不在でお政だけのところぢや厭だらうと兄は云つた。それだのに兄はわざわざ電話をかけて呼んでゐる。何が何だか兄の仕草は麟に不可解だつた。唯解し得たのは、自分の心に兄を疑ふ心のきざしたことだけだつた。麟は兄を何の點でも疑ふまいとした。兄が何をしてゐるか、そんなことは決して疑ふまいとした。事その事に就ては決して疑ふまいと力めたが、兄が霧の中の存在の如く朦朧となりかかるのはいかんともしがたかつた。麟は一刻も早く芝居を出たかつた。京都を逃れたかつた。
「まあ麟さんどすか、お久しをすえな。」
「どうも御無沙汰しました。」
さういふ會話も煩に堪へなかつた。麟は寺町のお政の傍から、兄の傍から、出來るだけ早く去りたかつた。

麟は朦朧と煙つてゐる休憩室でかすかに目を閉ぢた。癲癇の發作のある嫂、小金持の寺町の母子、風眼の墨染の小母、——麟の瞼の裏でこれらの人が夢のやうに現はれて消えた。殆ど廢人と云つていい嫂と、何處か剛膽で深味のあるやうな兄とが一番強く麟の頭へ來た。その周圍に寺町と墨染のソフトフオカスの顏が浮んだ。順子——その顏を思ひ浮べようとして麟は慌てて頭を振つた。
自分は何を想像しようとしてゐるのだらう——麟は竦然とした。
「今の幕面白かつたな。」
「あれからどないなるのやろ。」
「そんなこと分つたら面白ないがな。そやけど深刻やな。あんなこと、もつと大人にならんと分らんで。」
「そらそやて。若いうちはもつと綺麗ごとで行かうとしよるさかいな。色戀でも何でも年とつたやつのは凄いで。」
麟の隣りに腰かけてゐた二人の青年は芝居に就てしやべり續けてゐた。麟がぼんやり會話を聞いてゐるとその前へ寺町のお政が忙しさうに立ちはだかつた。

「ここにおゐやしたのか。何しておゐる？東京が戀しなりましたか。今夜お歸りやて本間どすか。」
「本當です。非常に忙しいので。」
「もう一日ぐらゐよささうなもんどすがな。男はんて忙しいものどすな。折角京まで來て直ぐ歸らはらんならん。順ももう一兩日うちには歸つて來ますやろに。」
「さうですか。」
麟は靜かに云つた。
「へえ。あれもお目にかかりたがつてゐましたのに。いろいろお話しせんならん云うてましたのにな。えらう殘念がりますやろ。」
「私も殘念です。ですけど又ぢきお目にかかれるでせう。」
「まあ、まあ、男はんてさつぱりしといやすな。ほほほ。」
何と話しかけようと木の洞を叩いてゐるやうなものだつた。麟は僅かに響きに應じるに過ぎなかつた。
麟は寢臺車でゆつくり睡りたかつた。睡れるだらうか。睡れたなら此の訣の分らない夢がすつかり消えるだらうと思つた。清清(すがすが)しい頭で、一切の消え去つた頭で、明朝東京へ着くことを考へ

ると、やうやく麟に生色があつた。彼は東京へ歸つて蒼蒼と晴れ渡つた空を仰ぐときを想像した。その時自分自身、果して京都まで行つて來たのだらうか、それともずつと東京に居たままなのだらうか、――一昨夕からずつと東京驛頭に立つたままなのぢやないのだらうかと、疑ひ出しさうな氣さへした。

（十四年）

所謂生き死に

第一

麟は氷を包んだ手拭で鉢巻をしてゐた。半ば辷り落ちるやうに肱掛椅子に腰をかけ、兩手は力の抜けた姿勢でだらりと下げてゐた。持ち續けた興奮で顏の所どころは赧かつたが、手の皮膚は弛緩した蒼さだつた。——

凡て昨日のままの今日だつた。

「何だ、まだ病人のやうな恰好をして。」

かういひながら村野は麟の前の椅子に腰を下した。麟は物憂さうな眼を上げて村野の入つて來るのを迎へ、そのままの無言で村野の言葉を受けた。

「どうしたと云ふんだ。氷なんかあてて——頭がまだ痛むのかい？」

村野は先づ外側から觸れていつた。麟の樣子は昨日のやうに弱よわしかつたが、しかし其處には何處か二十四時間の經過を思はせるものがあつた。村野の肚づもりとぴつたり合ふ時間の効果が見えてゐた。次の二十四時間、更に二十四時間——村野は麟の癒る日をひそかに計算した。村

野は麟の様子をぢつと目守りながら、今日はいささかの揶揄を混へてもよからうかと思つた。
「おでこに氷なんかあててさ、まるで瘤みたいぢやないか。とつちまへよ。氷で冷える質の熱でもあるまいし、そいつをとつちやつて——」
さう云ひながら村野は立つて窓を開けた。
「第一かう閉めきつて、これぢやなほ蒸むしするばつかりだ。氷よりは窓を開けるのがいいし、序に外へ出りやなほいいや。ちと——散歩でもするんだね。」
「おい、閉めてくれ、寒い。」
麟はやつと口をきいた。さうして寒さといふより、何か皮膚を刺すものを怖れるやうな恰好をした。
「寒いつて陽氣ぢやないぢやないか。——そりや閉めてもやるがね。」
だが窓はそのままで、村野はもとの席へ戻つた。
「おい、閉めてくれよ。」
麟は顔を突き出して村野を睨むやうに見た。村野は麟の疲れた眼を見返しながら、
「さう執拗ぢや、」と云つた。「それぢや毒だよ。さらりとしちまへよ。せつかく昨日が今日になつ

たのぢやないか。それをまたもとへ戻しちや、もとも子もないや。」
「何でもいいから閉めてくれ。」
「そんなに云ふなら閉めてやるがね——素直に閉めてやるがね、その代り俺の云ふことも素直に聞くんだらうな。」と云ひすてて村野は窓を閉めに立つた。
「いろんなものが」麟はつぶやいた。「聞えて來るんだ。」
さう呟くのを聞くと村野は大げさに振返り、
「何だつて？」と云つた。「變な事、云はないことにしようや。」
そこで快活に笑つてみせた。麟はちらと咎めだてするやうに顔を上げたが、すぐそのまま眼を閉ぢた。村野は窓際の椅子に寄りかかつたまま莫に火を點けた。
麟はさすがにげつそりと痩せを見せてゐた。閉ぢた眼の下に醜い腫れぽたさの影を置いて、苦闘の跡を覗かしてゐた。これを見てゐると麟は、彼のいふ如く、生き死にの問題に直面してゐると云つてよかつた。苦悶、何處かさういふ字に嘘のない姿だつた。揉みくちやの苦しみ、そんな中にゐる人の姿だつた。——この中で麟が髯を剃りたての頬を見せてゐるのが、白じらと村野の目に映つた。が、髯なんか剃りやがつて、といふ非難よりは、麟らしいや、と其餘裕に同情のも

てる氣がした。

「おい。」と村野は麟に呼びかけた。「旅行には出掛けるんだらうな。——尤も出掛けないと云つたつて、曳きずつてでも行くわけだが。」

「分るもんか。」

「だつて約束ぢやないか。」

「こんな時の約束なんか、責任持てるもんか。」

「亂暴云つてら。こんな時だから約束したんぢやないか。そんなに直ぐぶり返しちや駄目だよ。昨日はとにかく俺に贊成したのだらう。その方がいいと思やこそ旅行に行くと云つたのだらう。昨日がそれでいいんなら今日はなほいい筈ぢやないか。世の中が別にどう變つたといふわけぢやなし。」

「そんな話にやいかないよ。俺の昨日の心持は明日の心持だ。」

「そんな分らん奴があるか。」

「君に分らんでもいいさ、俺の心持は。」

「君の心持？」村野は輕く云ひすてた。「そんなもの尊重出來ないよ。」

「なに？」麟は開き直つて氣色ばんだ。「尊重出來ない？」

「さうさ。」村野は憎にくしいほど煙を吐いた。「そんなもの尊重しちや君が滅びるだけだからな。」

麟は黙つてしまひ、また眼を閉ぢた。村野は、

「なあ、竹中。」と麟に呼びかけた。「とにかくこの赤つぽい部屋から出なけりや駄目だよ。君の云ふ第二の解決だつて——第二も第一も何だつて此處ぢや解決のつきつこないよ。どんな思案もまあ此處を出てからだね。それが先決問題のことは、君自身あんなに昨日認めてたぢやないか。」

赤つぽい部屋といふのは麟のこの部屋だつた。最近の彼の好みで壁紙が赤いのに張りかへられ、絨氈から椅子までダーク・レッドのひどく人から落付を奪ふものだつた。ひとりでにいらいらして來る部屋だつた。——およそ失戀したものの居るに適しない部屋に出來てゐた。

「昨日は認めたんだ。」

「それならいいぢやあないか、今日も認めろ。」

「さうは簡單にいかないよ。」

「簡單にいくよ。」

麟は感傷に自分を增長させてゐるのでないことは分つてゐた。しかし感傷に甘えてゐる傾きは